



**さっさと付き合えば  
よかったのにもたもたしてたら  
さっさと寝取られた幼馴染  
～のうてんきチョロイン～**



「友馬くん！おはよう〜♪」

「おーっす」

俺には幼馴染がいる。

家も隣同士で何をするにしてもずっと一緒だった同い年の女の子、  
中牧心乃（なかまきこころ）。

当たり前のように同じ学校へ進学し、当たり前のように毎朝一緒に  
登校する。



青春を謳歌する年頃のクラスメイトからすればそんな関係のこてこて  
幼馴染コンビはやはりからかいたくなるのだろう。

ちよくちよく「ちっさ」と付き合えよwもどかしいなww」などおふざけ  
混じりに茶化されるが正直なところ悪い気はしなかった。



…心乃も同じ気持ちでいてくれたら嬉しい。

周りに言われずとも、いつかきつとこの気持ちを心乃に…。



□放課後

友馬「心乃、帰ろうぜ」

心乃「あ、ごめんね友馬くん。ちよっと係の仕事頼まれてて…今日は先帰ってて♪」

友馬「…そうか」

クラス全員がなにかしらの委員会や係を担うことになっているが、心乃は【用務補佐】という係だった。



用務員のおじさんの雑務を手伝うとい  
うそのままの意味。

放課後に空き教室のちよつとした整理  
をしたりと、はつきり言ってお面倒でしかな  
い完全なハズレ枠の係である。

係を決める際、のんびりし過ぎてたらこ  
の係しか残っていなかった。

幼馴染から見ても心乃はそれなりに可  
愛いため、いい恰好をしたいのだろう男子  
数名が「俺、代わってもいい」と名乗り出た  
が当の心乃は「うーん、でも別にいいよこ  
れで〜」とのんきに返答していた。



友馬「俺も手伝おうか？別に暇だし」

心乃「平気だよ、そんなに大変なことやらされるわけじゃないし」

「それに用務員のおじさん優しいんだよ、話してても楽しいし♪」

友馬「…」

心乃「終わったたら宿直室でお茶とお菓子出してくれるんだ♪」

友馬「宿直室で…二人で過ごすのか」

心乃「うん！」

友馬「…」



なんとなくひっかかる表情をする友馬。

空き教室や宿直室があるのは旧校舎側。

放課後にもなれば教師も生徒もほとん

ど入ることはない空間。

そんな場所で二人きり…。



友馬「…あの用務員さん…なんか心乃のこ  
と変な目で見てないか？」

心乃「も〜！そんなわけないじゃん(笑)友  
馬くんたらそんなこと言っちゃダメだよ」

思わず心でモヤツと感じていたことを

口に出してしまう友馬。

しかし心乃はへらっつと笑い流していた。

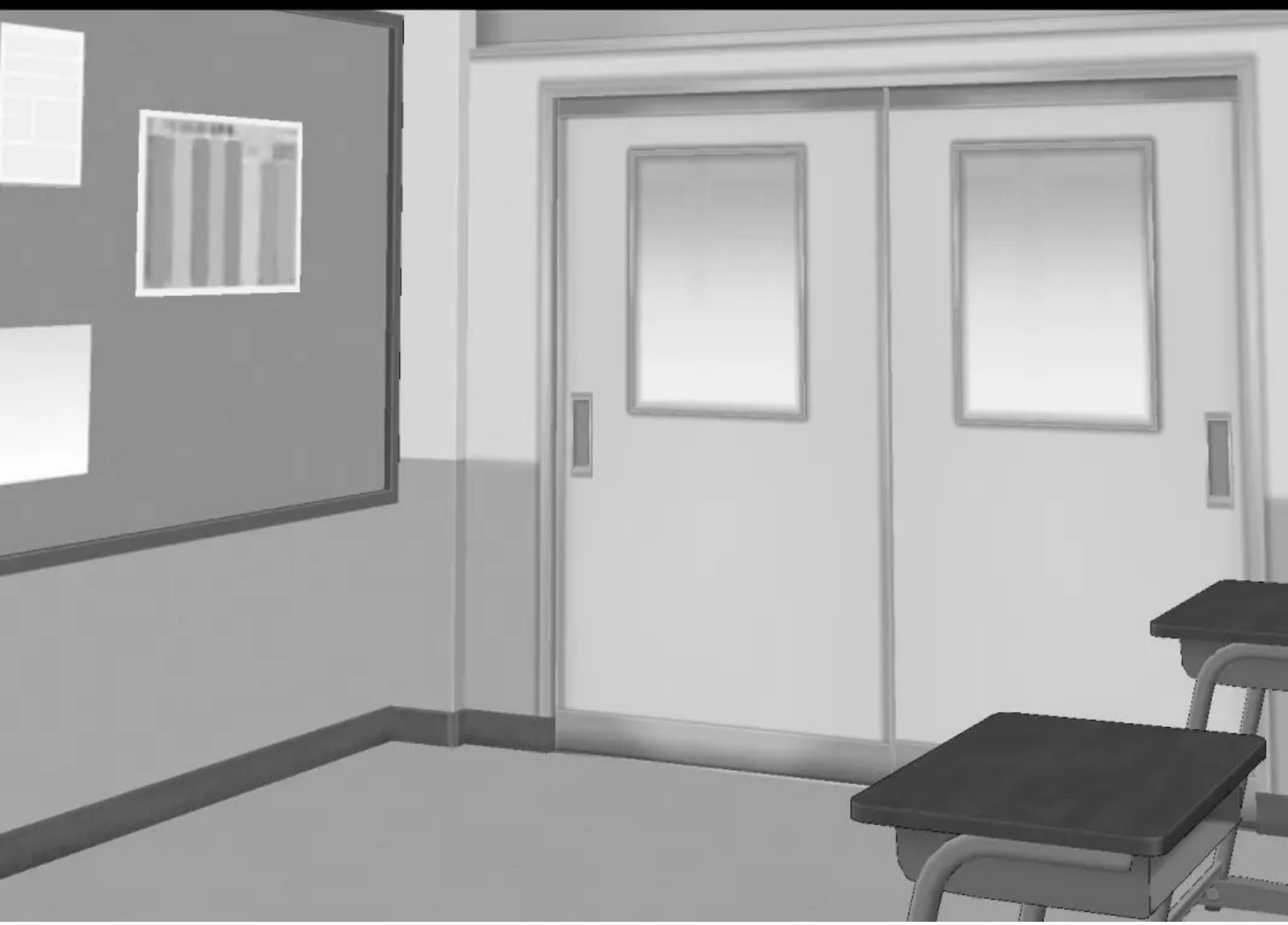
心乃「それじゃあ私はお手伝いしてくるか  
ら、友馬くんは先帰ってていいよ」

「んじゃね〜♪」



その言葉をかけてサッと教室を出て  
行ってしまった。

友馬「…」



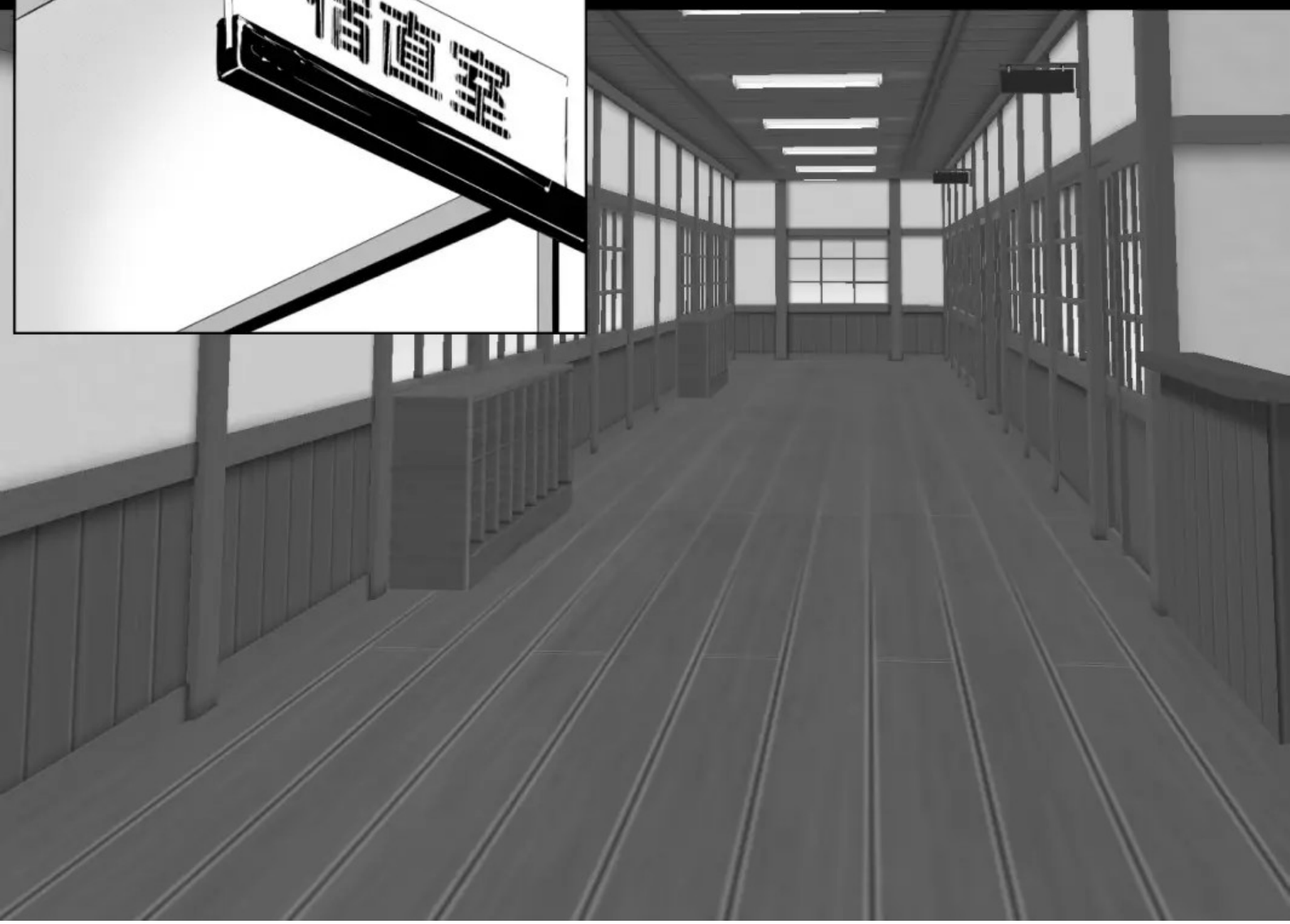
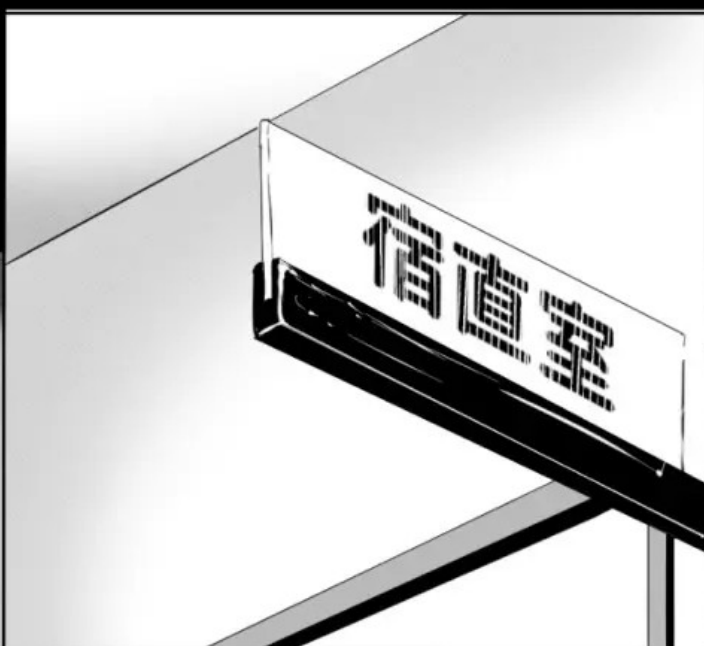
□旧校舎、宿直室

友馬の言った通り、人の気配が全くない放課後の旧校舎。

端のフロアにちよこんと設置された個室から、会話する声がかろうじて漏れている。

ドアの上部には【宿直室】と表記されたプレートがある。

畑山「お疲れさん心乃ちゃん、しっかり休んでいっていいからね」



心乃「いやあ〜すみませんねえ〜…って、空き教室の整理を10分やったただけなんですけどね(笑)」

6畳ほどの畳部屋。ちゃぶ台にお茶とお茶菓子を置く用務員、畑山敏夫(はたやまとしお)。

畑山「いやいや、十分助かってるよ」

「誰も来ない場所で一人で黙々仕事してるのも空しくてね、話し相手がいてくれるだけでモチベーションも上がるよ」

心乃「無駄なお喋りならいくらでもできるので(笑)」



畑山「はははっ、この係って面倒にしか思われてないみたいでね、担当になった生徒もそのうち来なくなっちゃったりとか結構あるんだ」

心乃「それは由々しき事態ですなあ〜見過ごすことはできませんぞっ」

「しかし〜安心を！私心乃は決してそのような事には至りませんので!!」

畑山「頼もしいよ(笑)まあ、こんなオヤジと放課後に一緒にいるなんてどう考えても嫌だからなあ」



心乃「ええ〜？おじさんと喋るの楽しいですよ？お菓子食べながらこうやっておじさんとお喋るするの私好きだけどなあ〜」

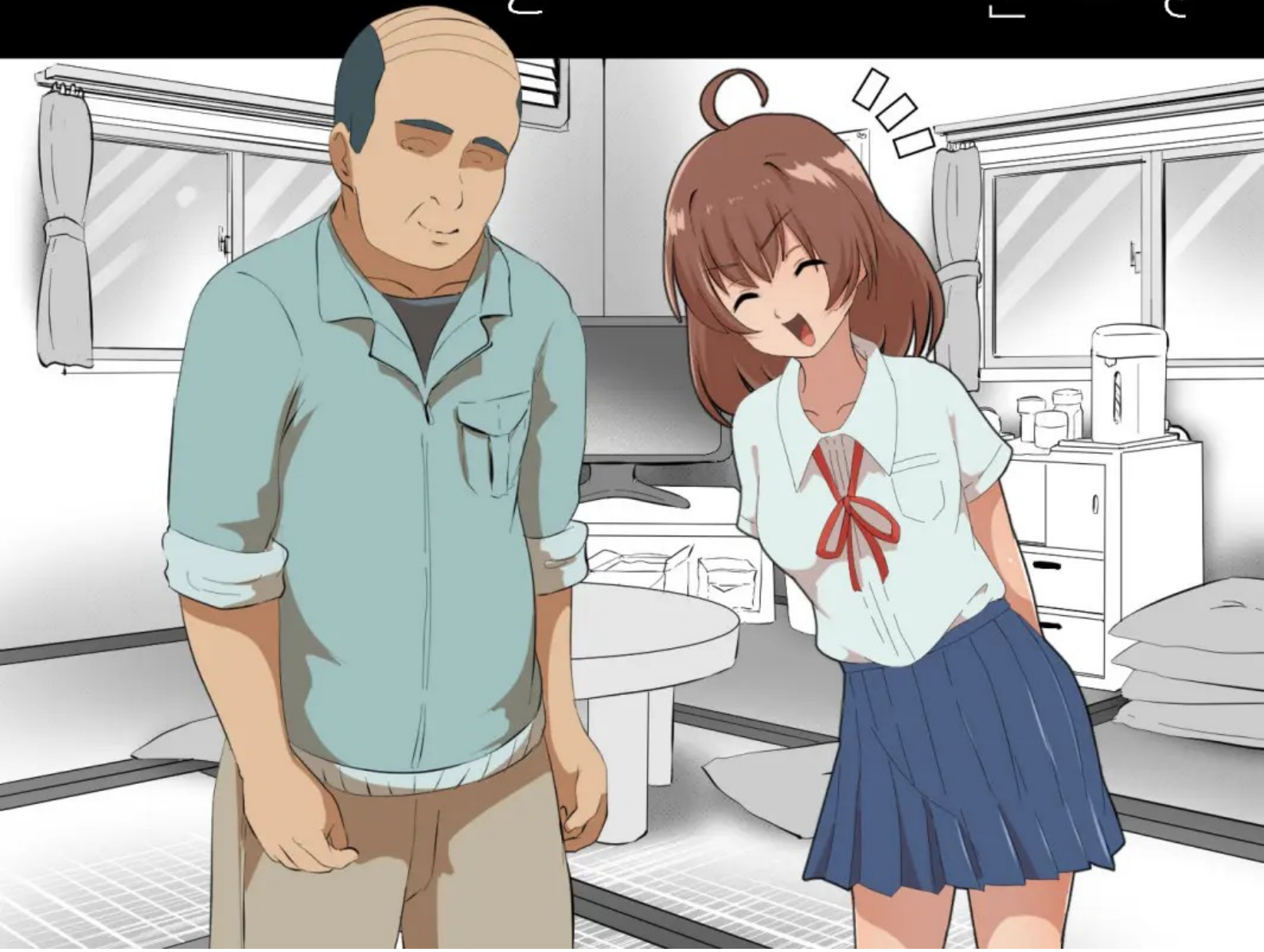
畑山「…本当に？」

心乃「うん！」

畑山「おじさんのこと好き？」

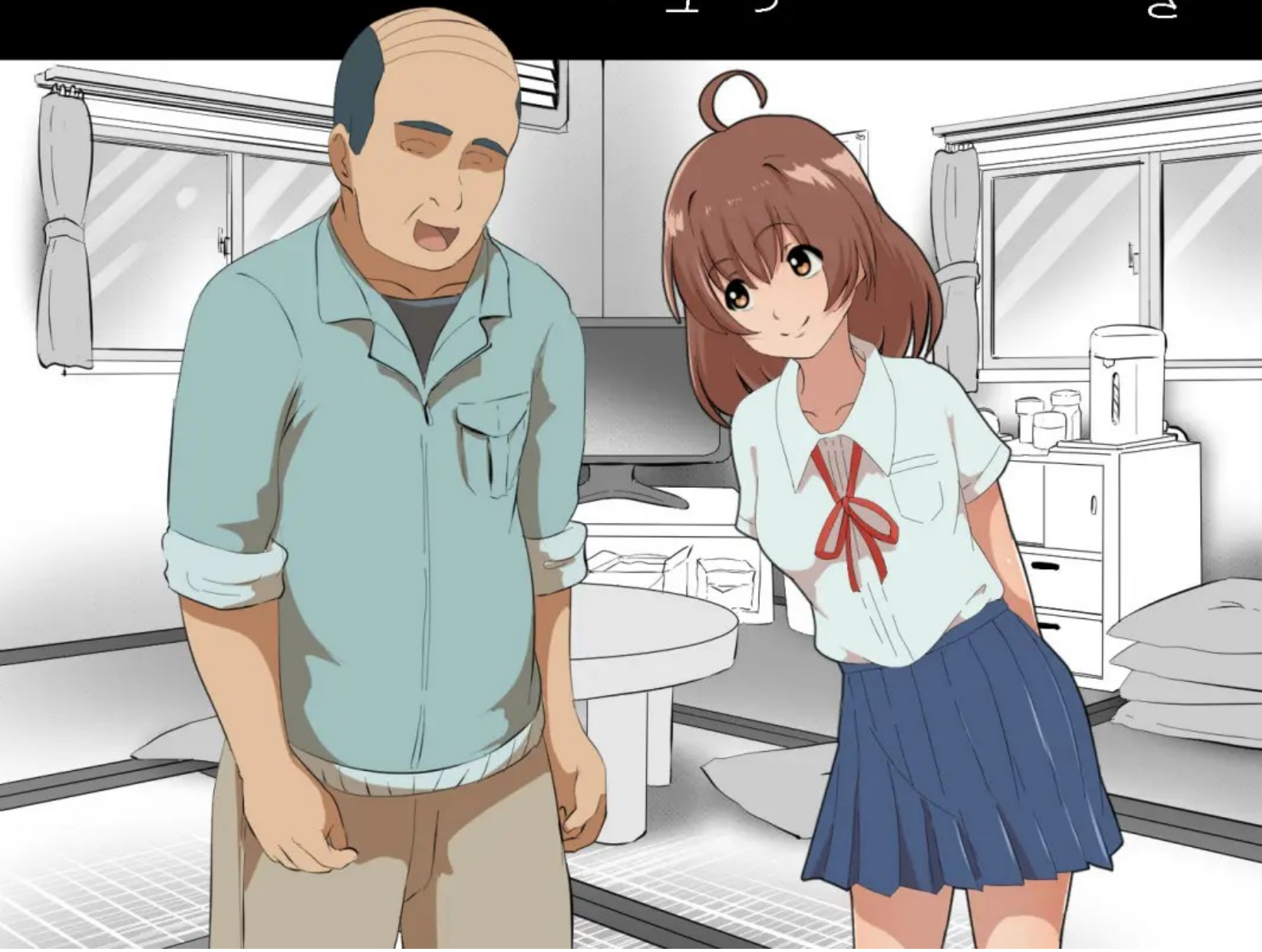
心乃「うん！」

「…っていやいやおーいwwwそっすい」とじゃなくて(笑)」



心乃「ん〜でも…まあ…？…うん！好き  
だよおじさんのことも(笑)」  
畑山「それは嬉しいなあ！」  
心乃「えへへ」

少しだけ意味合いが読み取れず、絡まっ  
たような返答をしてしまったが、まあニユ  
アンスとしてはそこまでおかしいこと  
でもないかと思っただ心乃。



心乃「そういえば…」

畑山「ん？」

心乃「幼馴染の友馬くんがねえ、ちよつ

と変なこと言ってる」

畑山「変なこと？」

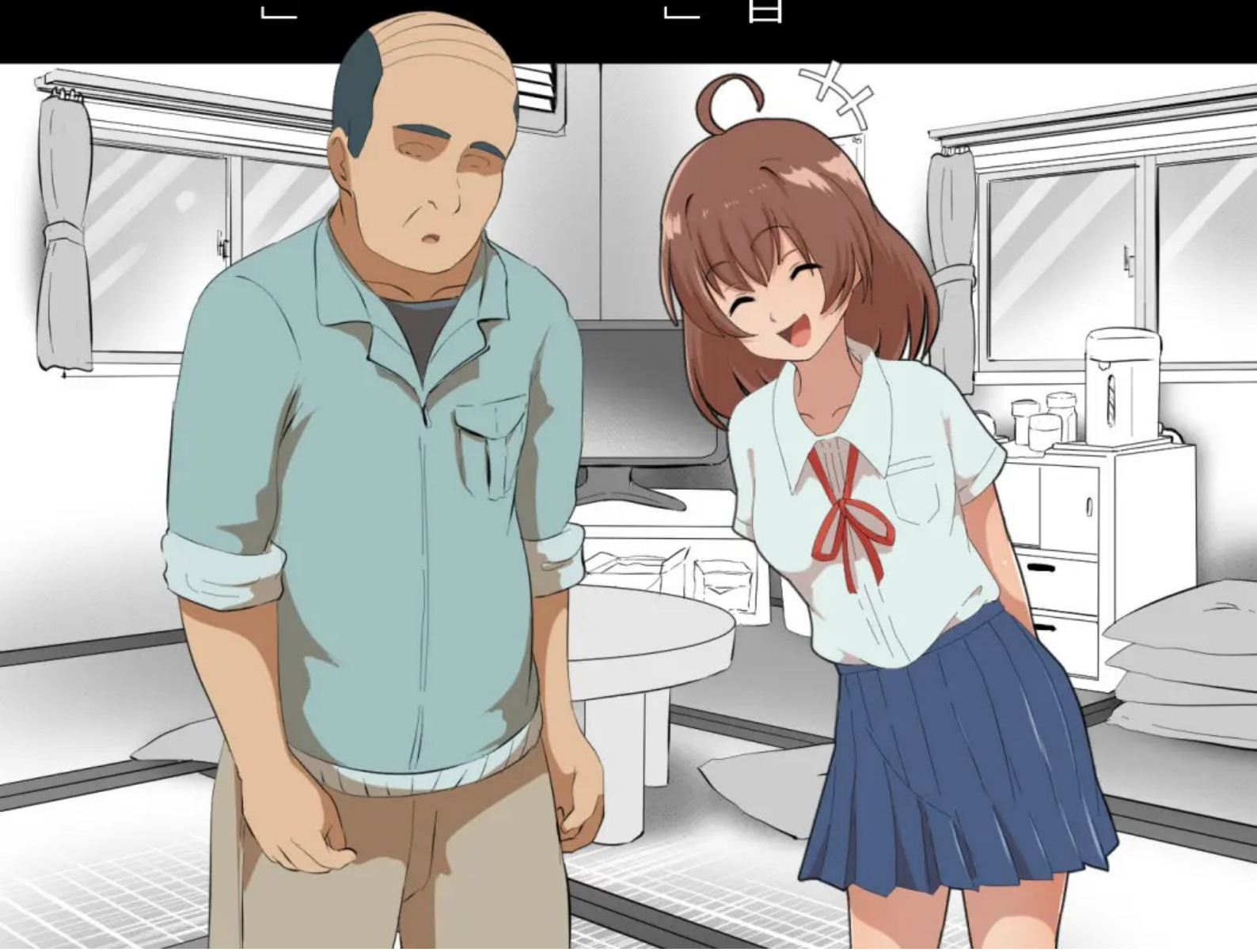
心乃「用務員のおじさんが私のこと変な目

で見てる気がするから気をつけろって！」

畑山「…はははっ！」

心乃「失礼しちゃいますよね〜(笑)先生

が生徒にそんなこと思うわけないのにw」



畑山「…」

心乃「…おじさん?」

畑山「…」

心乃「どうしたの……はっ!？」



心乃「ま、まさか…本当に私にイケない  
ことしようとしてたんじゃ…!」

畑山「…」

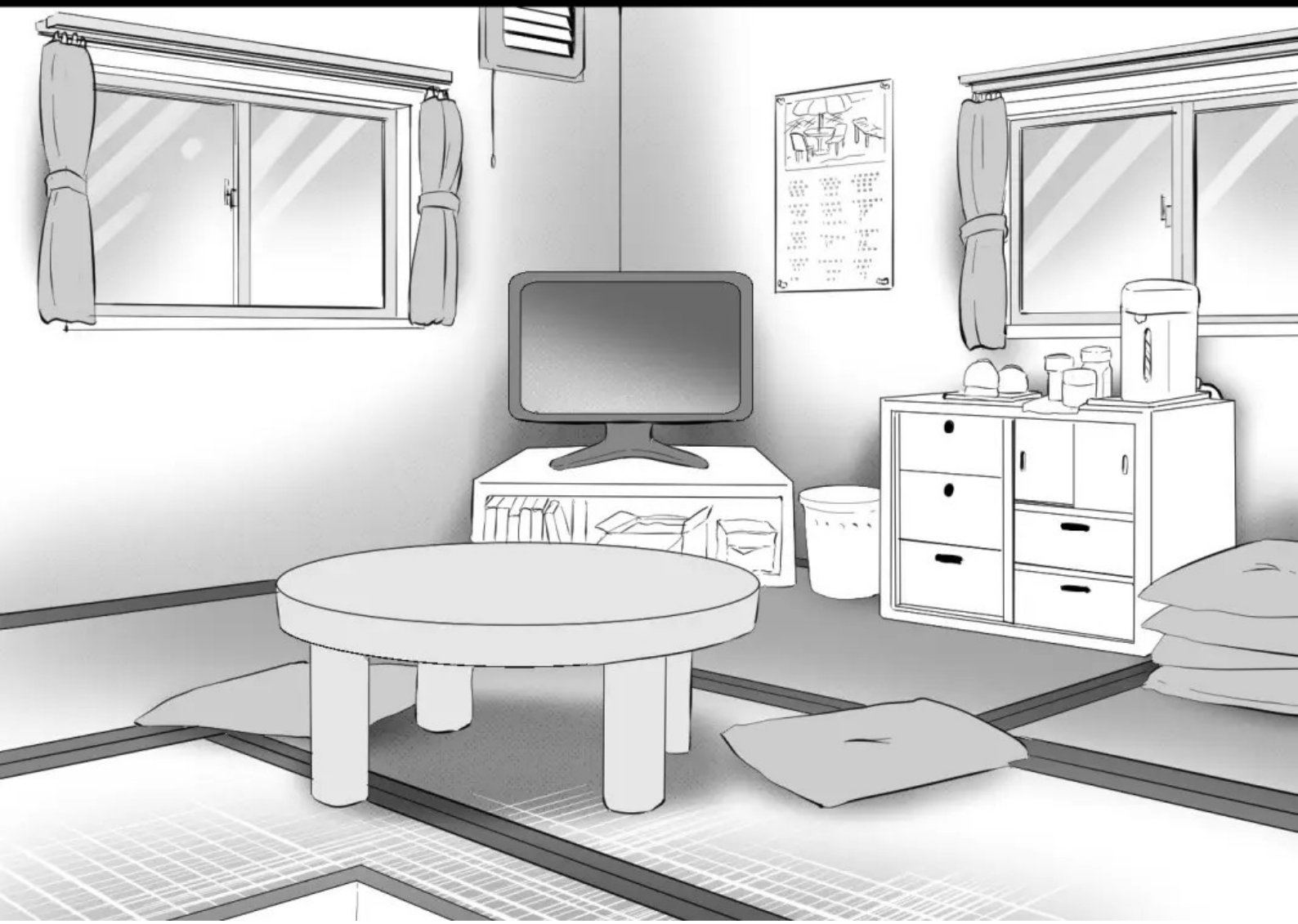
心乃「あ、あわわ…いや…いやあ…」

畑山「…」

心乃「…っ!!」



二人『……ぷっ(笑)』



心乃「なーんてwそんなわけないですよ  
ねえ〜(笑)」

畑山「ははははっ(笑)」



心乃「あはは♪」

畑山「ははは♪」

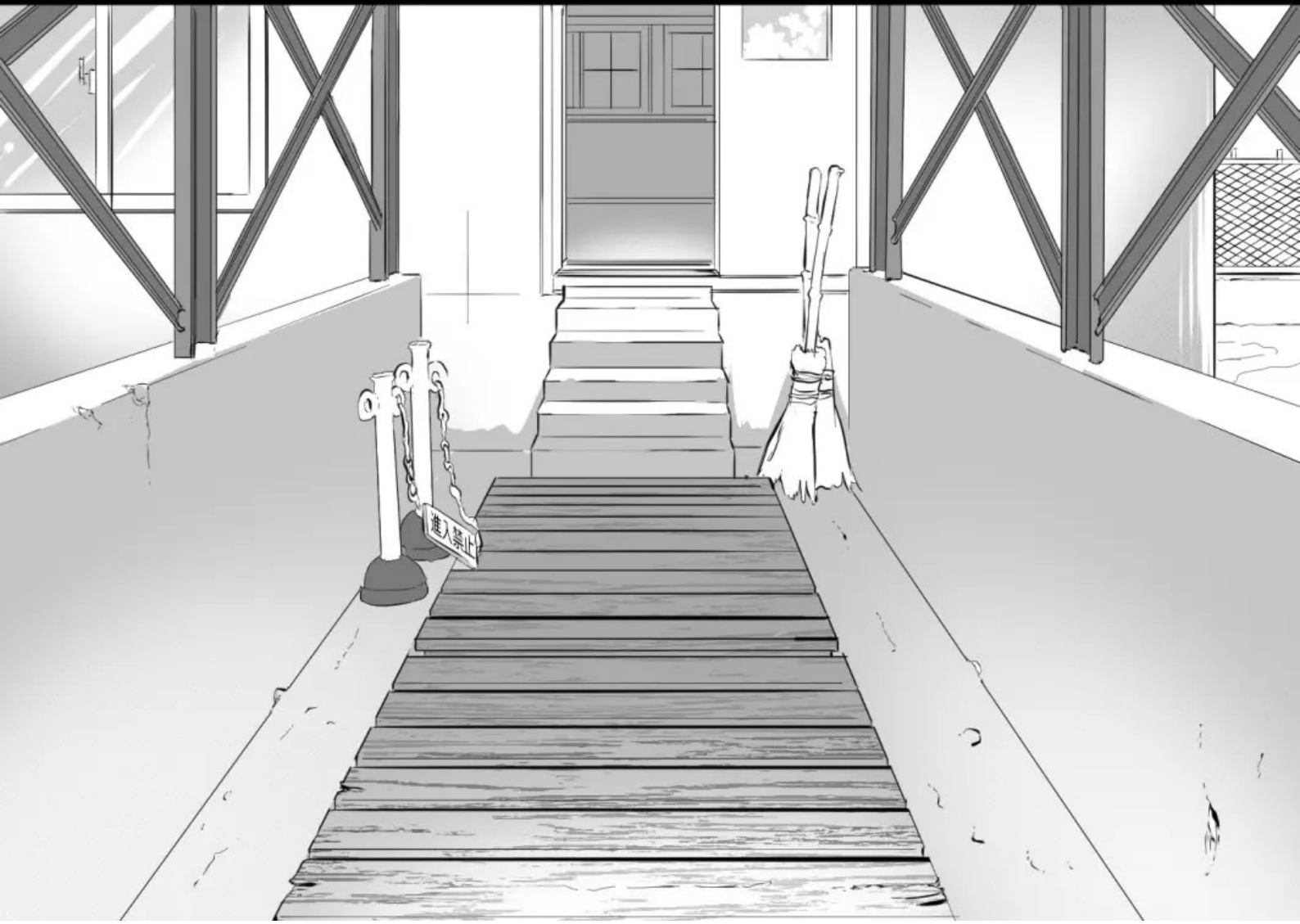


友馬「…」

旧校舎…。

もう雑務は終わっているだろうし、心乃の言っていた通りなら宿直室で休憩しているはずだ。

キョロキョロあたりを見回す。本当に人気がない。



結局様子を見に来てしまった。

それも直接ではなく、外から窓越しにチラッと覗こうという形で。

我ながら過保護というか…いくら幼馴染でも過干渉過ぎるのだろうか…。

…いや、幼馴染だからこそ心配なのだ。

決しておかしい感情ではない。



宿直室は一階の端に配置されているので、十分外から様子を伺うことはできるはず。

と、思っていたのに窓にはカーテンが引かれていた。

閉め切られていてどうやって中を覗くことはできない。



心乃ちゃん！

心乃ちゃん！！

ほおおおっ…お！！

~~~~っ！！

換気扇なのか、「ブウウ…ん~~~~っ！！」  
と古いタイプの空調機が近くで稼働して  
いて、閉め切った室内の音は全く聞こえ  
なかった。

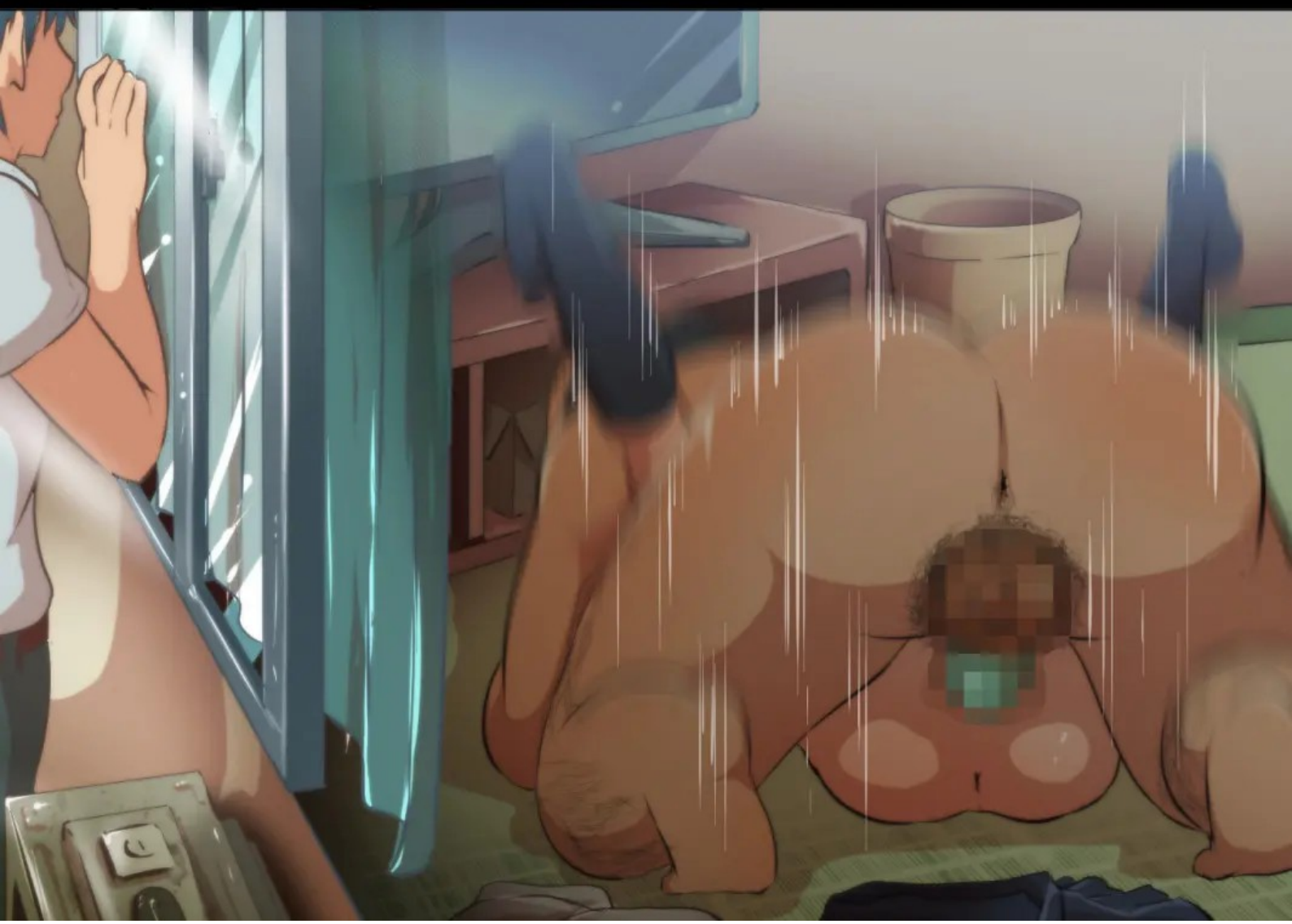


畑山「心乃ちゃんが悪いー！こんな可愛すぎ  
る女の子と二人きりでいたらセックスし  
たくなるに決まってる!!」

「無邪気に短いスカートふりふりこっぴ…  
ハイソックスの脚くねくねおせし…」

そもそもいるのかすら分からない…。

しかし空調機は動いているし…、この宿  
直室だけのために稼働しているわけでは  
ないだろうけど……んん…。



畑山「謝れ……！謝れえ……！可愛すぎて

いめんなわてしん……！！」

心乃「~~~~っ！か、可愛すぎていめん

なさいい……っ！」

畑山「ダメだ……！許さん……っ！！」

心乃「~~~~っ！！」

どうしようもなかった。

こんなことなら普通に校内から部屋に

入ればよかったか……。

友馬「……ふう、まあ……何ともない……か」



畑山「大丈夫だよちゃんとゴムはしてるからね！気持ちいいだけの安心安全セックスだからね！！」

「気持ちいいって言ってー今はまだ苦しいかもしれないけど…言葉にしてれば段々そうなってくるから…！本当に気持ちよくなってくるから！お願い！！言って！！」

少し、落ち着いてきた。

別に何か起こるなんてことないか。

ただ、係として雑務を手伝うだけ。それ以外の何でもない…だろう。



心乃「きっ……！気持ちいい……！」

畑山「もっとー！」

心乃「気持ちいい……！」

「……！！」

友馬「帰るか……」



畑山「おじさんもどっつても気持ちいいよ

…！心乃ちゃんとのセックスすごく楽

しいよ！心乃ちゃん…！」

心乃「お、おじ…さん…！気持ちいい

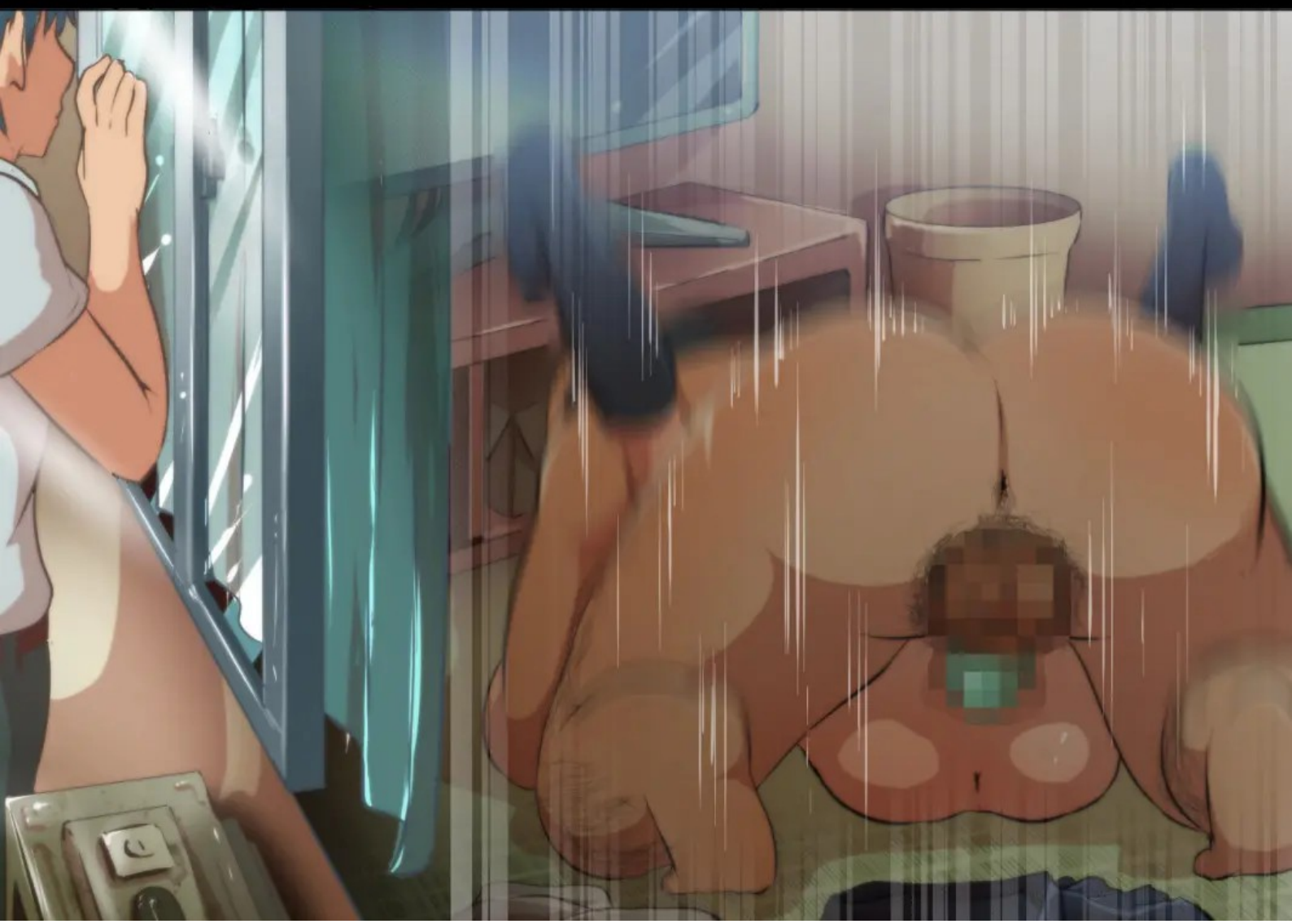
…気持ちいい…っ！！」

家で飯でも食う前に一つ連絡を入れよう。

特に意味のないやり取りを交わそう。

幼馴染というお互い気張らずにいら

れる関係だからできること。



畑山「……」

心乃「……」

そして明日もいつものように一緒に  
登校しよう……。。





||  
||  
||

友馬「…」

「友馬くんおはようっ！」

友馬「…おーっす心乃」

心乃「えへへー！遅刻…じゃないよね！んじゃ今日も元気に学校に行きましょ♪」  
友馬「ああ…」

いつも通り…いや、いつもよりちよっとテンションが高いくらいだった。

何も変わらない俺の知ってる幼馴染、中牧心乃。





心乃「あつ、今日は購買にメロンパン売ってる日だ！ラッキー♪」

友馬「…おばさんに弁当作ってもらってるだろ」

心乃「いやあく甘いものは別腹ですよ〜(笑)」

友馬「…ははっそうか」

心乃「〜♪」

うん、いつもの心乃だ…。

□放課後、教室

友馬「…あれ？」

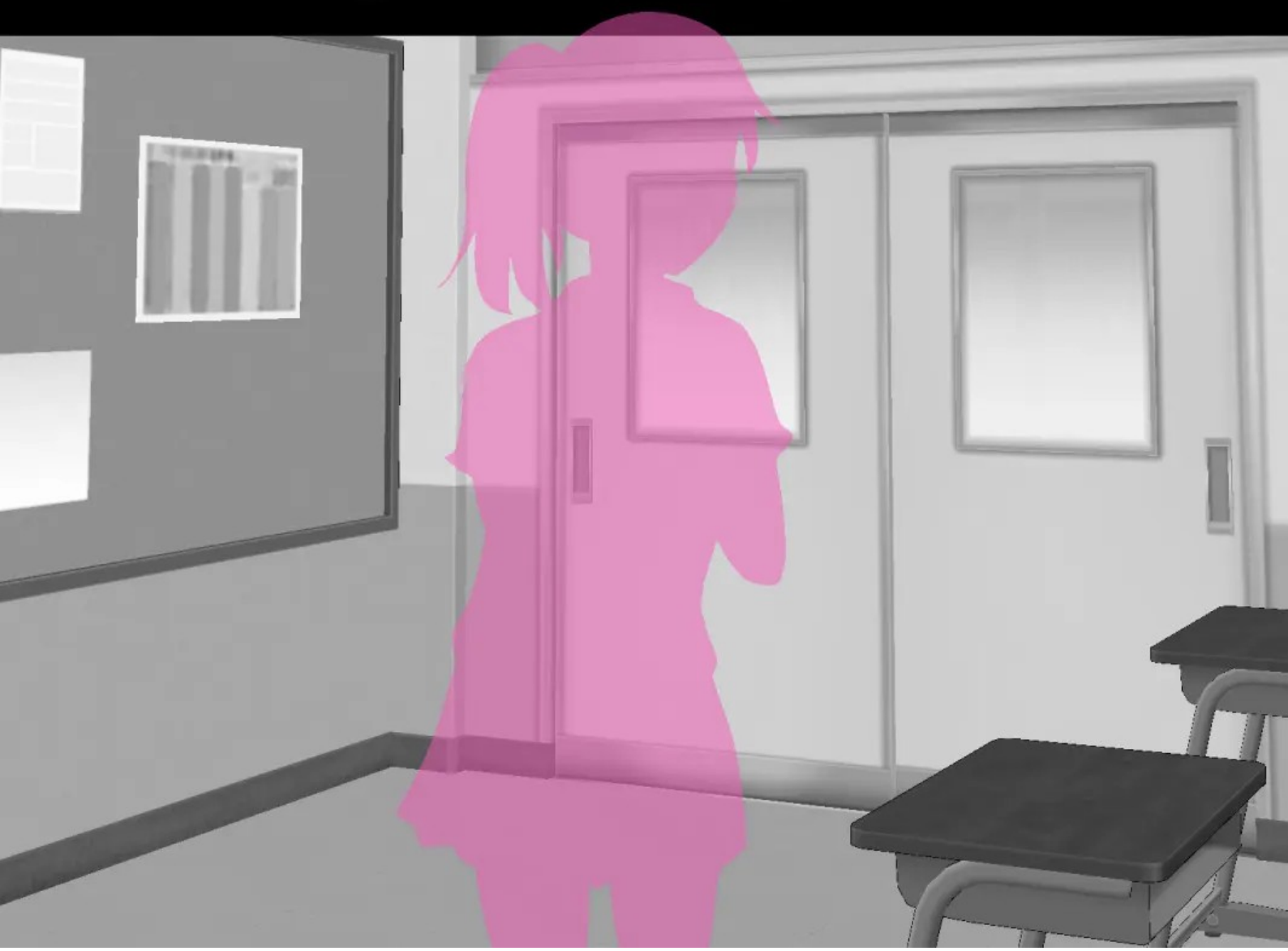
ホームルームが終わる。

今日こそ心乃と一緒に帰ろうと思って  
いたが、クラス男子に声を掛けられ5、6  
分ほど話し込んでしまった。

気づくと教室に心乃の姿は見当たらな  
かった。

クラス女子A「心乃、なんか係の仕事ある  
から〜って言ってたよ」

友馬「あ、そっ…か」



…さっさと旧校舎に行ってしまったの  
だろうか。

それなら今日は、校内から様子を見に行  
ってやろうと思った…が。

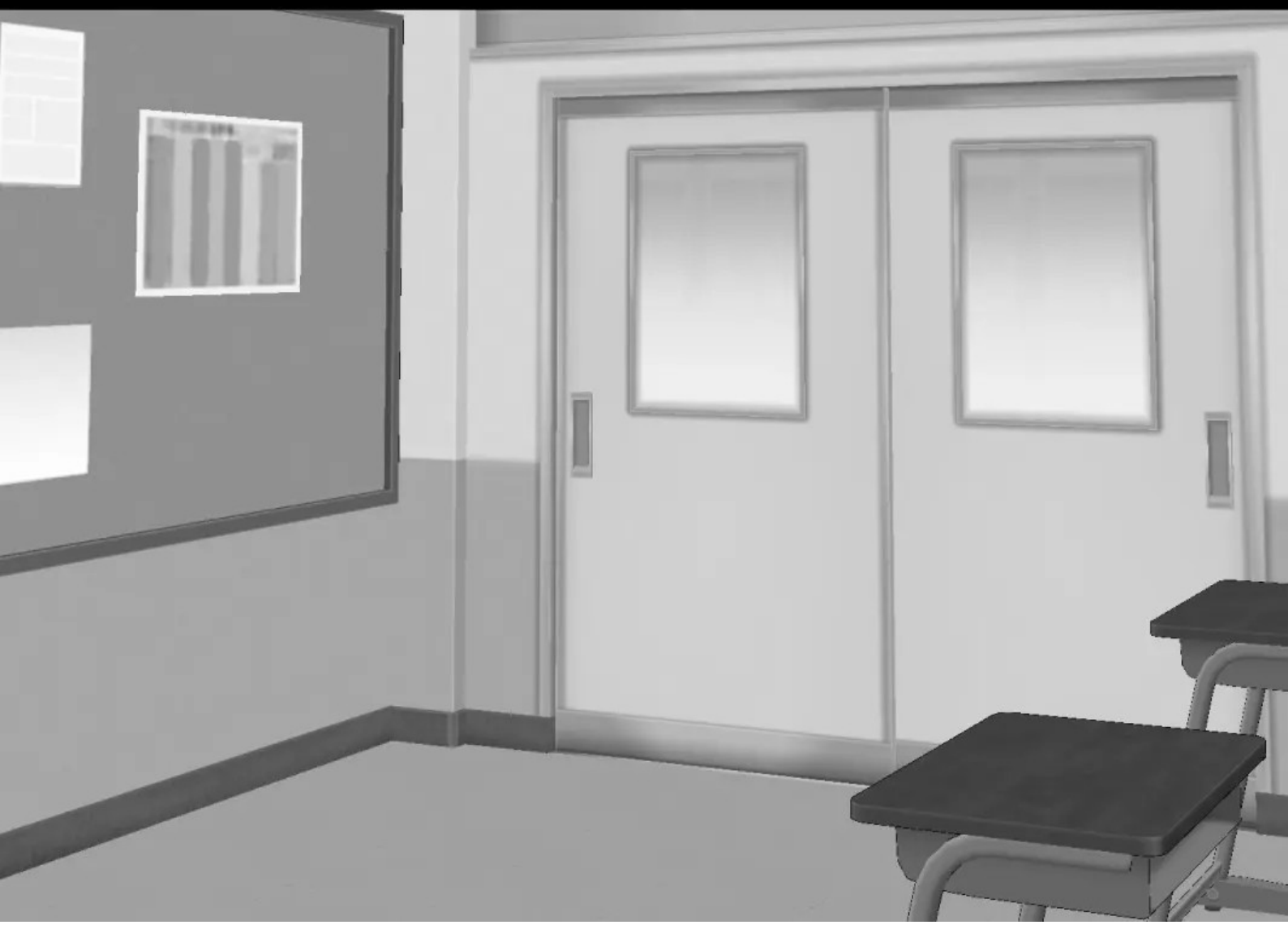
友馬「…」

なんとなくモヤツとした。

なんで一言言ってくれなかったのだろ  
う。

いや、もしかしたら声は掛けたが、自分  
が気付かなかっただけなのかもしれない。

…やはり、自分は心乃に構い過ぎなのだ  
ろうか。



幼馴染だからと何をするにしても一々話さなきゃいけないなんて変…か？

友馬「…」

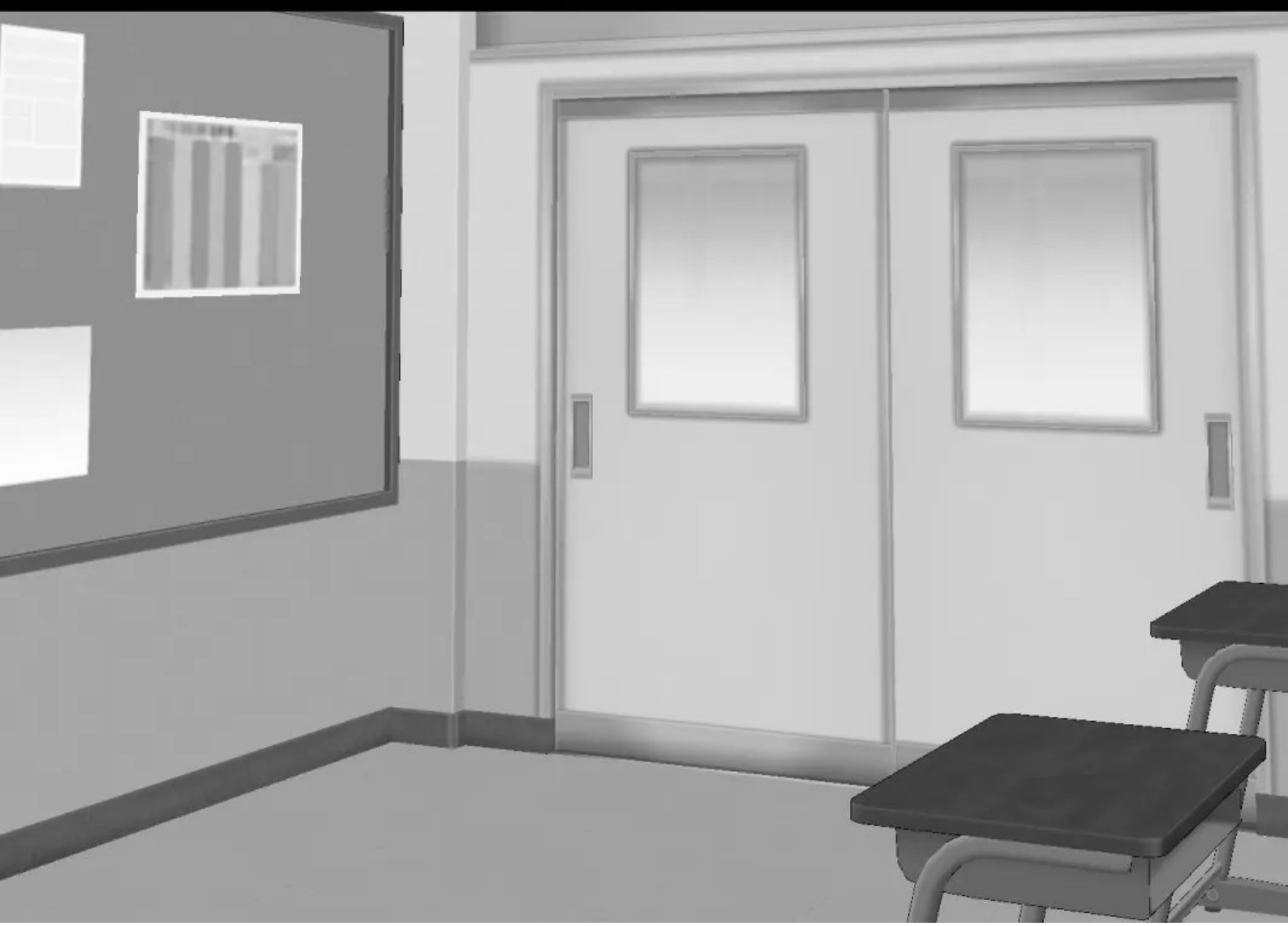
用務員のおじさんに勝手な想像で勝手なことを言ってしまった。

心乃も内心困っていただろうな。

よく考えればまさか生徒相手にどうかしてやろうなんて思ってるわけがない。

友馬「…」

色んな事を頭でぐるぐる考えた。



友馬「…よしっ！帰るか!!」

帰ろう！

多分俺は考え過ぎなんだ。

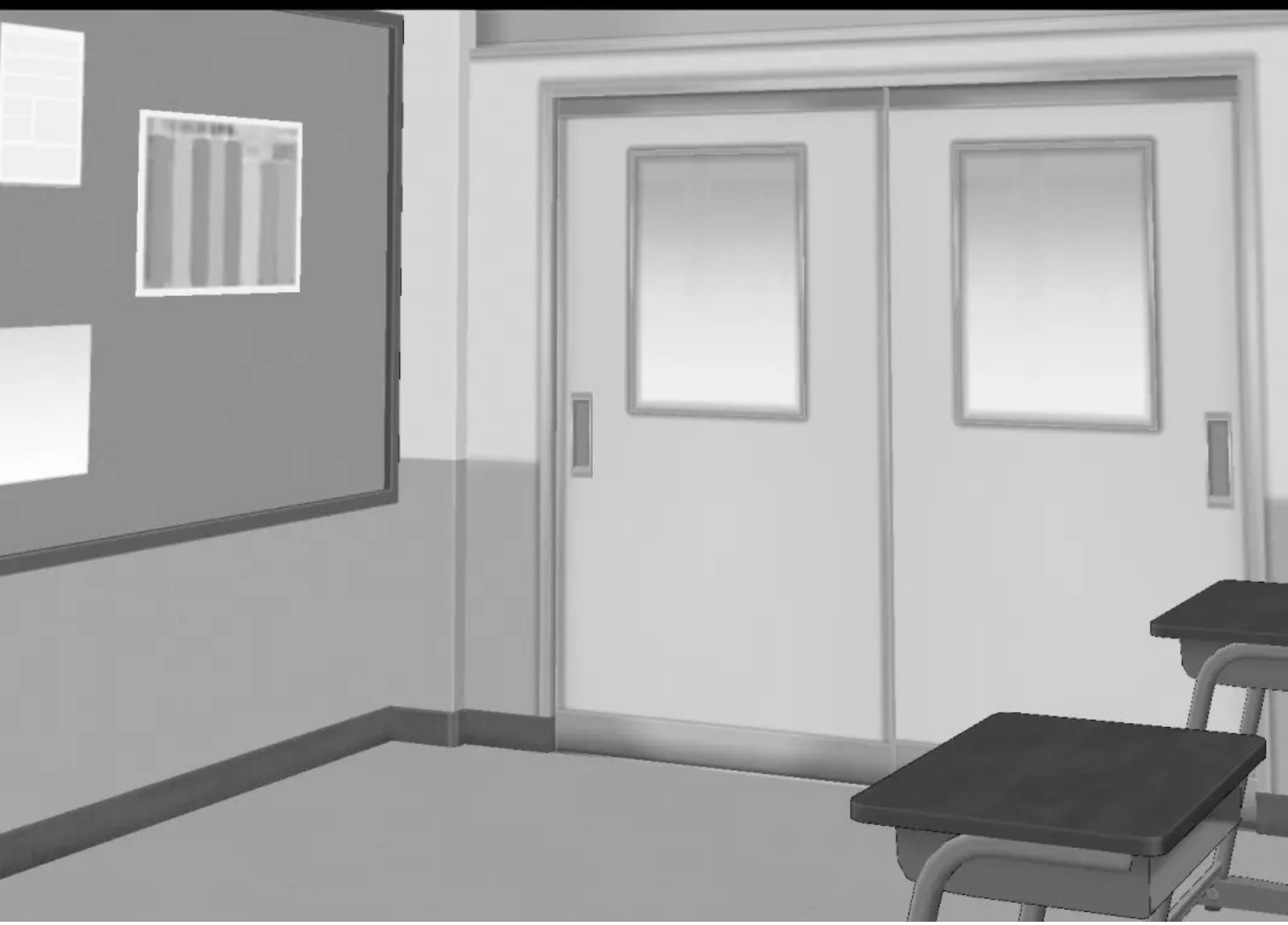
心乃と二人きりの時間を過ごさせる用務

員さんに嫉妬してただけだ…(笑)。

友馬(…二人きり)

…いやいや！だからそんなわけないだ  
ろ!!

変なこと考えてんのは俺の方だ…。



友馬「おーっす！どっか寄ってくるの？俺もいいwww?」

クラス男子A「あれ？心乃ちゃんと帰らんの?」

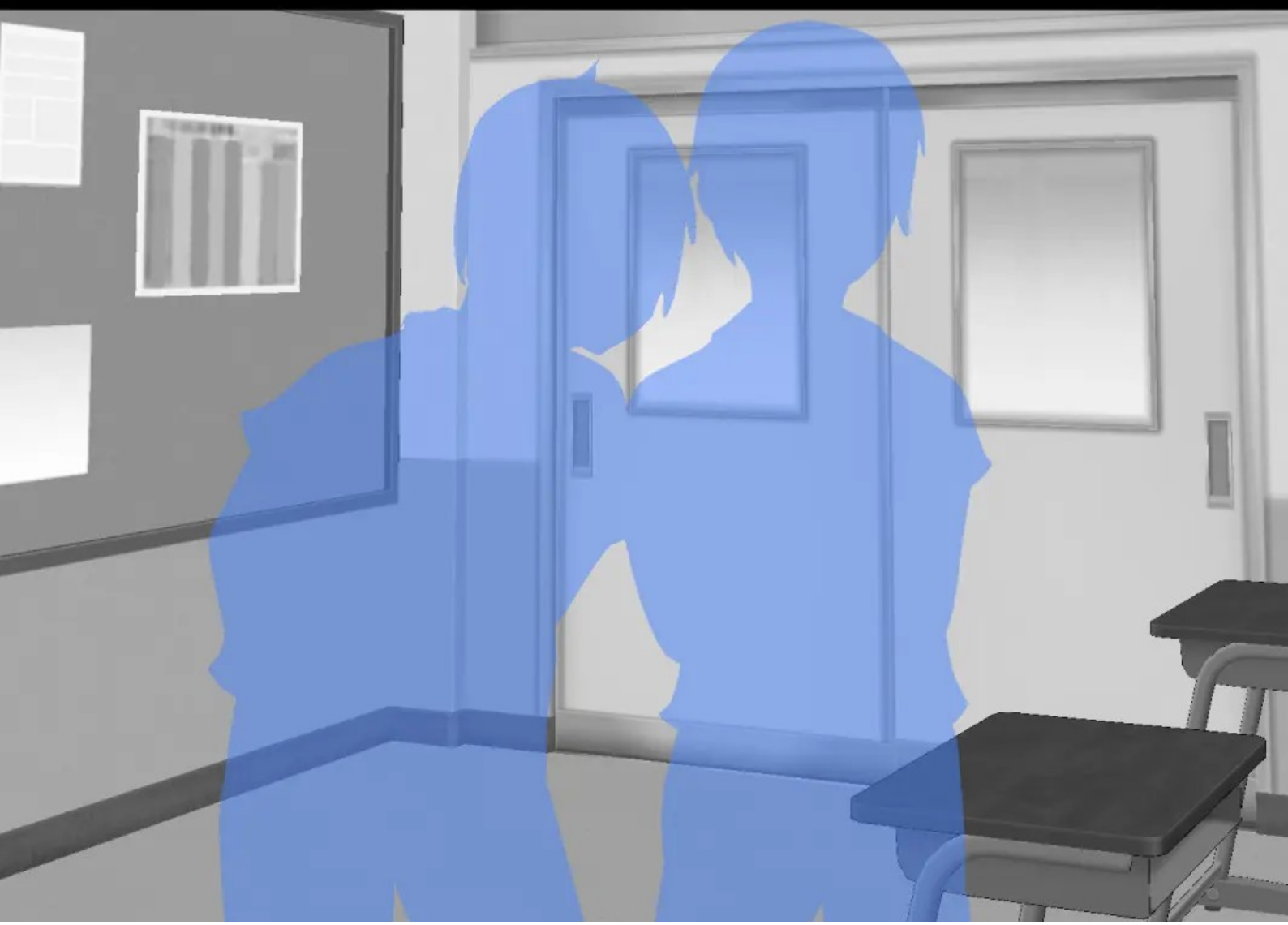
友馬「いつも一緒な訳じゃないわwww」  
クラス男子B「いつも一緒だろwww」

友馬「うっせwww」

男子B「早くセックスしろよ！感想教える!!」

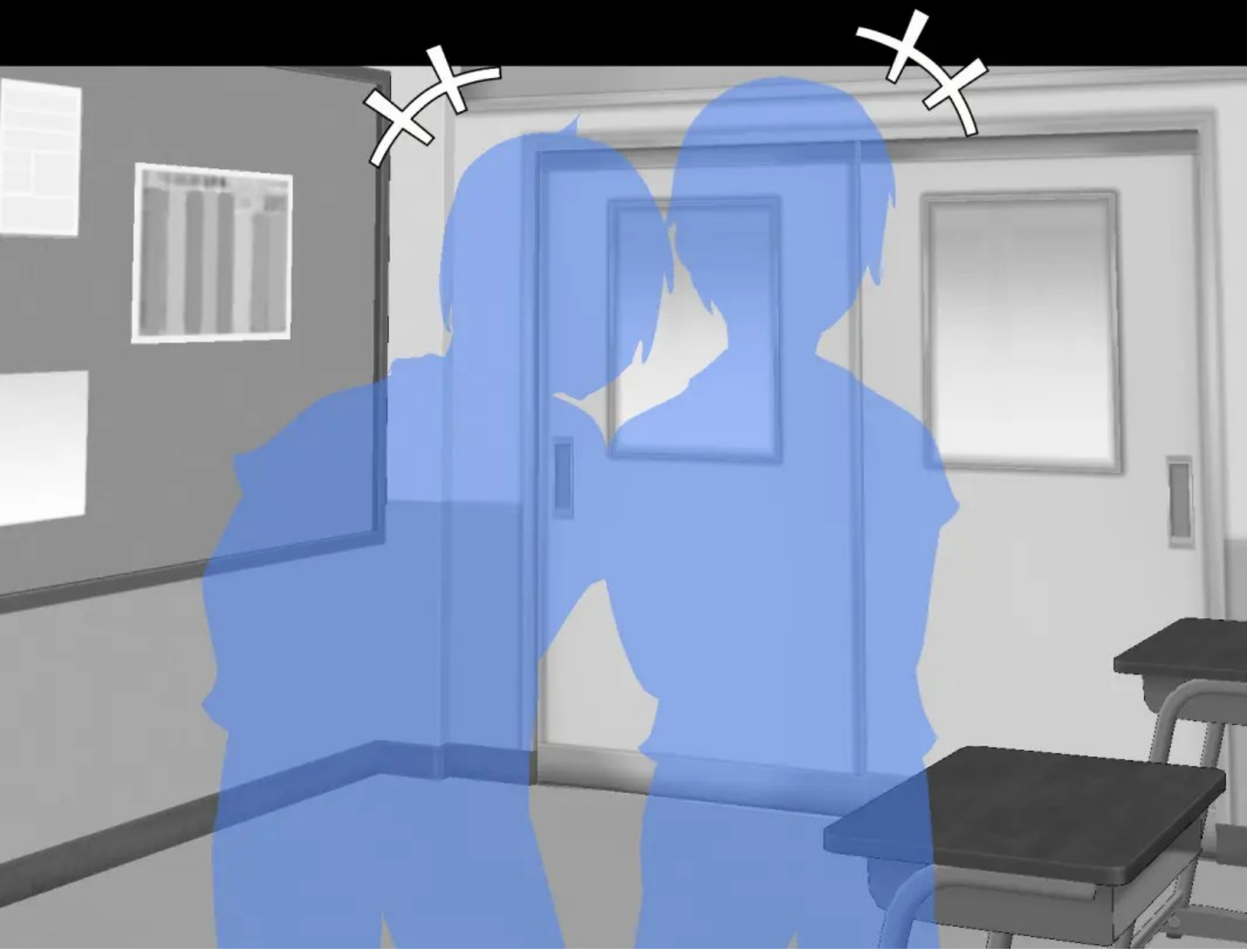
友馬「www」

男子A「www」



心乃は心乃の意思で行動してるんだ。

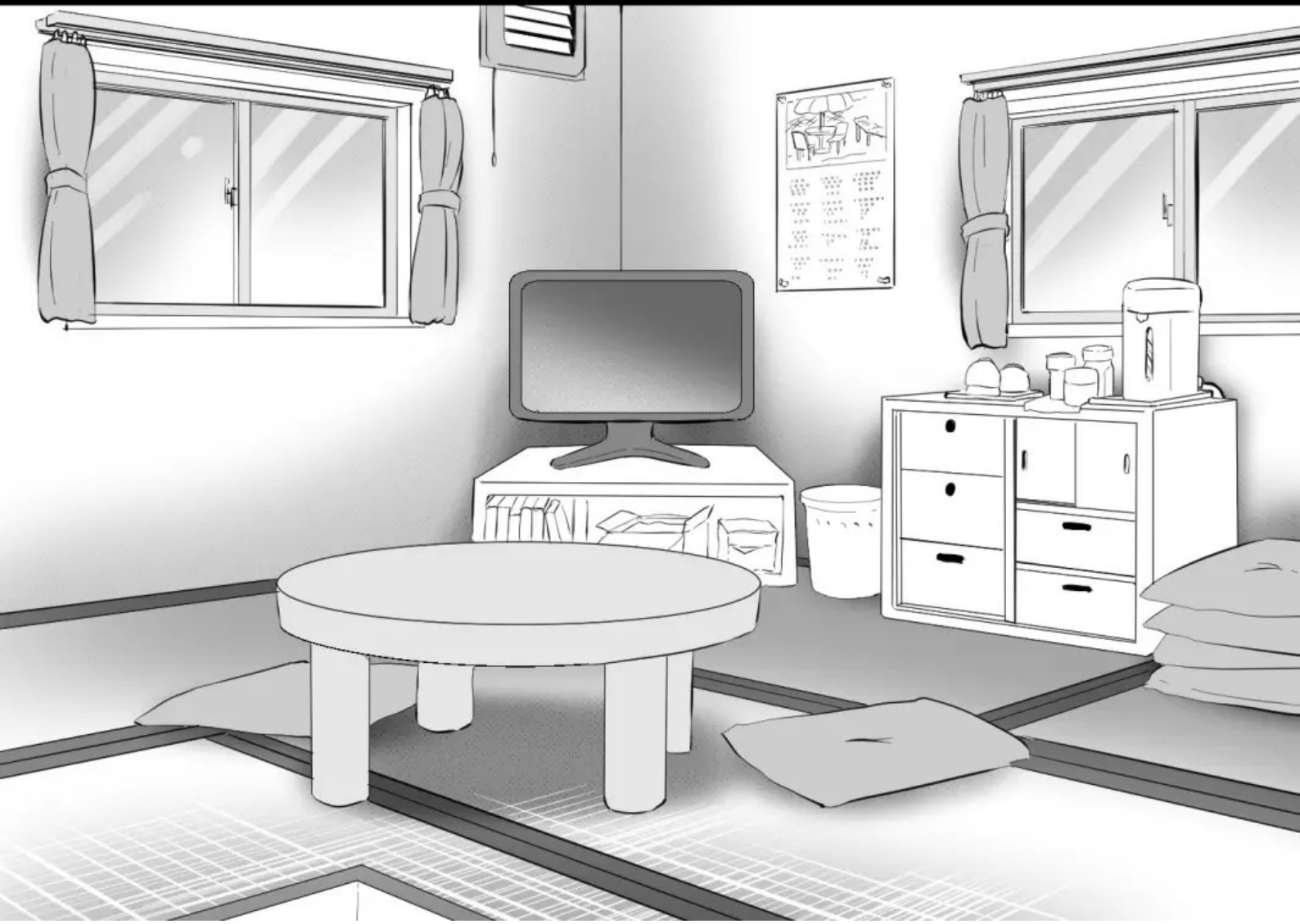
俺も俺で馬鹿やって楽しんでよう。



＝  
＝  
＝

「んっんっ…んっ」

「おお…お」



畑山「ハアハア…今日も来てくれて嬉しいよ心乃ちゃん…」

心乃「…私のごとく、ずっととろろと目を見てたんですか…?」

畑山「……うん」

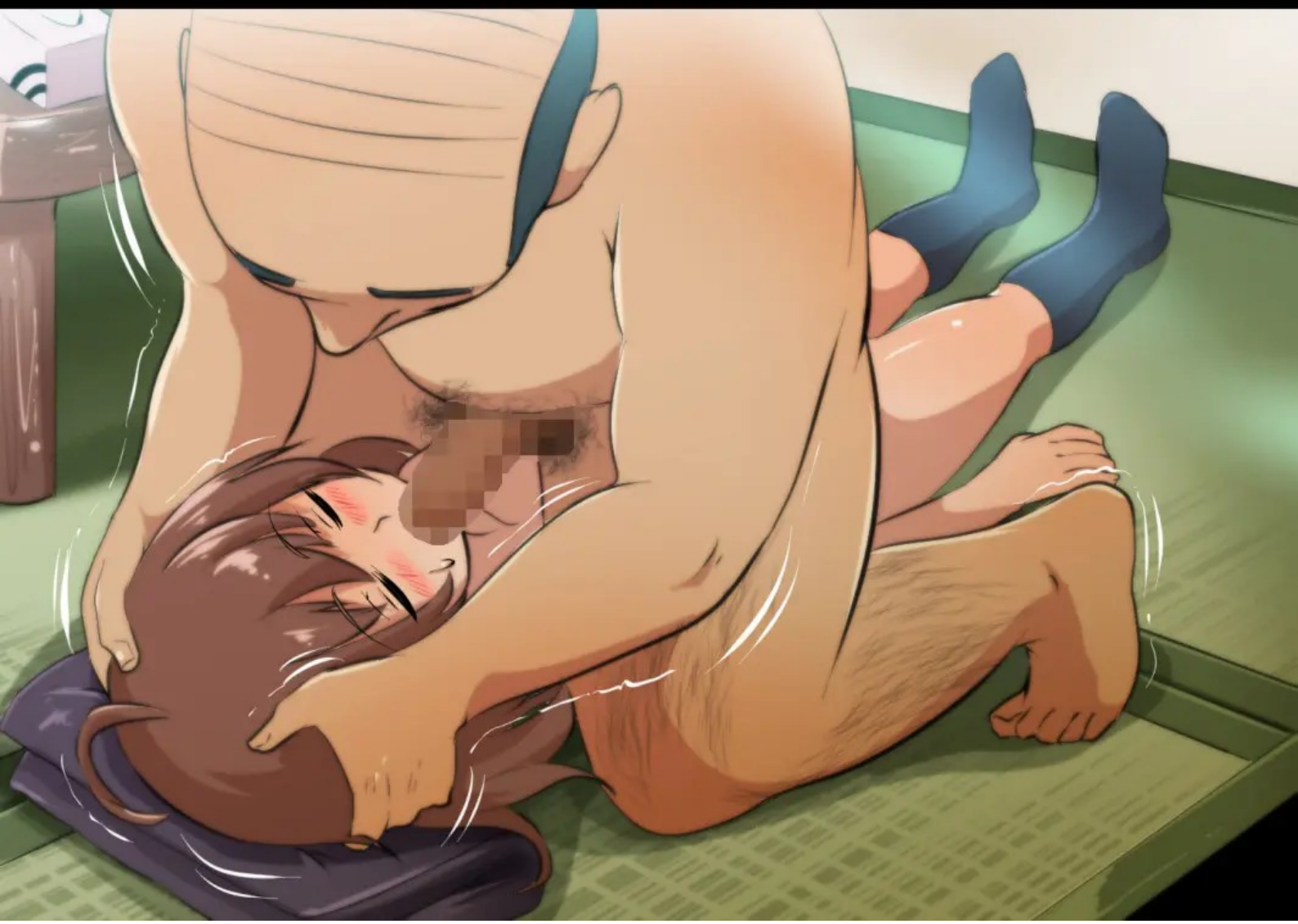
心乃「いや、うんって…正直すぎる…」



昨日あれだけのことをされて、心乃は  
何故か当然のように宿直室に出向き、用  
務員に会いに来た。

そして今日は仰向けに寝かせられると  
このプレイを要求された。

…当選のごとく受け入れている心乃。



心乃「…私、危機感なさすぎるのかなあ」

畑山「そうだね、こんなのほんとしてたら悪い人にいいようにされちゃうよ…気を付けないと」

心乃「おーいっ」

学校に勤める者と生徒という関係上、絶対にあってはならないことをしているのに関わらず、妙な空気が漂っていた。

心乃に抵抗しているような気配がない。



畑山「心乃ちゃん…吸って…強めでいいよ…！」

心乃「…んんっ…!!」

畑山「ほおお…お…お…き、気持ちいい…！」

心乃ちゃんの口…ヤバい…ヤバいい!!」

心乃「んん…ヤバい、じゃよく分からないですよ…どんな感じですかあ？」

畑山「ホントにヤバいって感想しか…あっ

あ…もっと吸って…ひよっつとごみたいに吸って…思っしゅごー」

心乃「…んん…!!」

畑山「…!!」



一方的に奉仕という形でやらされているのに、ひたすら従順に指示を受けていた。

…嫌、といった感じではなかった。

いけないことをされているはずなのに、

畑山が自分の行為で喜んでくれているのが変に嬉しく思ってしまう心乃。

畑山「心乃ちゃん……おじさんのキモチにこんな吸い付いてくれるなんて…!!心乃ちゃんがこんなにエッチな子だったなんて……!」



心乃「…私ってエッチなんですか？」

畑山「そうだよ！心乃ちゃんはエロエロ

女子だよ…！」

心乃「…そっかあ…私…エッチ、だったんだ…♪」

畑山「心乃ちゃんイくー！イく…！いい？

このまま…！」

心乃「…ん♪」

イく、とはどういったことなのか。昨日  
されたことでしたっけ理解している。

理解したうえで承した。



畑山「~~~~っ!!」

心乃「んんんっ…!!」

遠慮なく排出される白濁色の粘液。

口の中をじわあつと満たしていく。

あつという間に心乃の口内を支配した。

今、心乃のぷくつと頬張った口内には自

分の性そのものが詰まっているのだと思

ったら一瞬だけ脱力した畑山のソレは瞬

時に元通りになった。

畑山「ハアハア…気持ち…よかった…」

心乃「…っ」



畑山「幼馴染の友馬くん、だっけ…？こんなことしてあげたら絶対骨抜きになっちゃうよよ…(笑)」

急に幼馴染の名前を挙げられ、無意識にも友馬の顔が思い浮かんでしまう。

直接見られているわけでもないのに、今の自分の状況を意識したら妙な気持ちになってしまふ心乃。

胸がトクントクンと速いテンポで打っているのがしっかり分かる。

口の中には畑中の性でいっぱいになっている。



跨った体勢でいる畑中は動く気配はない。

畑中「…心乃ちゃん」

心乃「…」

どうすればいいのか…畑山は自分に何をしてほしいのかが分かった。

心乃は喉を鳴らし、口内を満たす自分に向けられた性を胃袋に流し込んだ。



□土曜日

休日だが部活動に励む生徒はグラウンドや体育館、各部室にちらほらいた。

…旧校舎には相変わらず人っ気はない。

休日の旧校舎など入る者はいない……  
はず。



畑山「ハアハア…私服…私服の心乃ちゃん…可愛い…!!」  
心乃「えええ？別にいつもこんな感じだけどなあ〜」

誰に言われようとどんな状況だろうと服装を褒められればやはり嬉しい。

SNSで互いの連絡先を教えあったが、畑山が一言『明日来れる?』と連絡したら、一つ返事です承した心乃。



『校内って私服でも入れますか?』

『直で宿直室来てくれたら大丈夫!』

『というか私服で来てくれるの!?!』

『制服の方がいいですか(笑)?』

『自由な服装でお越しください』

『ちなみにニーハイフェチです』

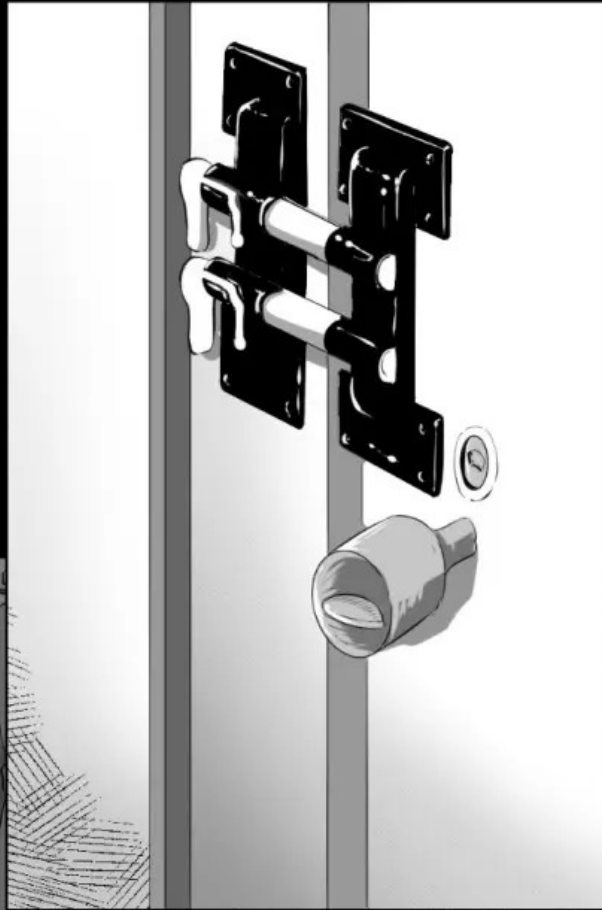
『りょ(笑)』



いつものように宿直室に入ると、ドアと窓の鍵を閉め、カーテンをしっかりと閉め切る。

木造の古い建付けのドアにホームセンターで購入した新品の後付けタイプの鍵がアンバランスについている。

妙にギラギラしていて、この部屋には二人以外絶対に入らせないという感じを醸し出していた。



ただでさえ教師も生徒も絶対近づかない空間をさらに校内から切り離すように室内を閉め切る。

自分たち二人だけの空間を作るように。

：だとしたらそういった施設を利用すればいいのかもしれない。

しかりそれはお互いに違うとはっきり言えた。

学校内だからいいのだ。

絶対にあってはいけない関係上、絶対にしてはいけない行為を全力で行う。



心乃「…あれって「コンドーム」ですよね」

畑山「〔徳用144個入〕」

心乃「わあ…」

デザイン性など皆無のただ〔徳用144個入〕とだけ小さく表記された箱。

ひたすら数をこなしたい人向けの潔よさに心乃は自然と吐息が漏れる。

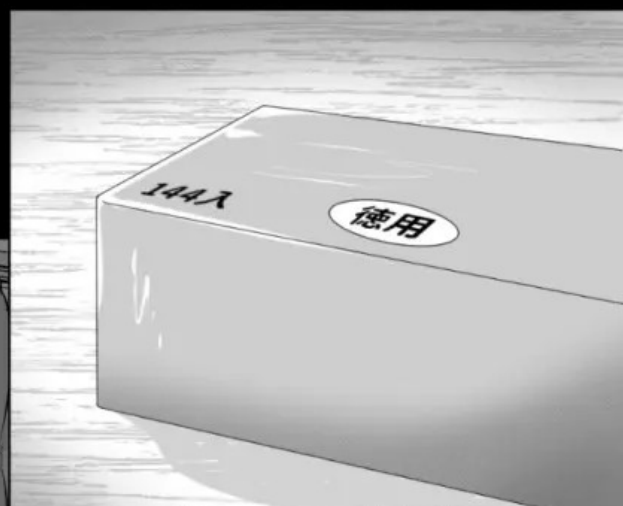
畑山「コンビニでおにぎりとか

パン、ちよっとしたお菓子買って

きたから」

「クーラーボックスには飲み物

もあるよ」



心乃「…準備万端じゃないですかあ、一体いつまでやる気なんです…？」

畑山「うーん…」

「飽きるまで」

心乃「どっちが、ですか？」

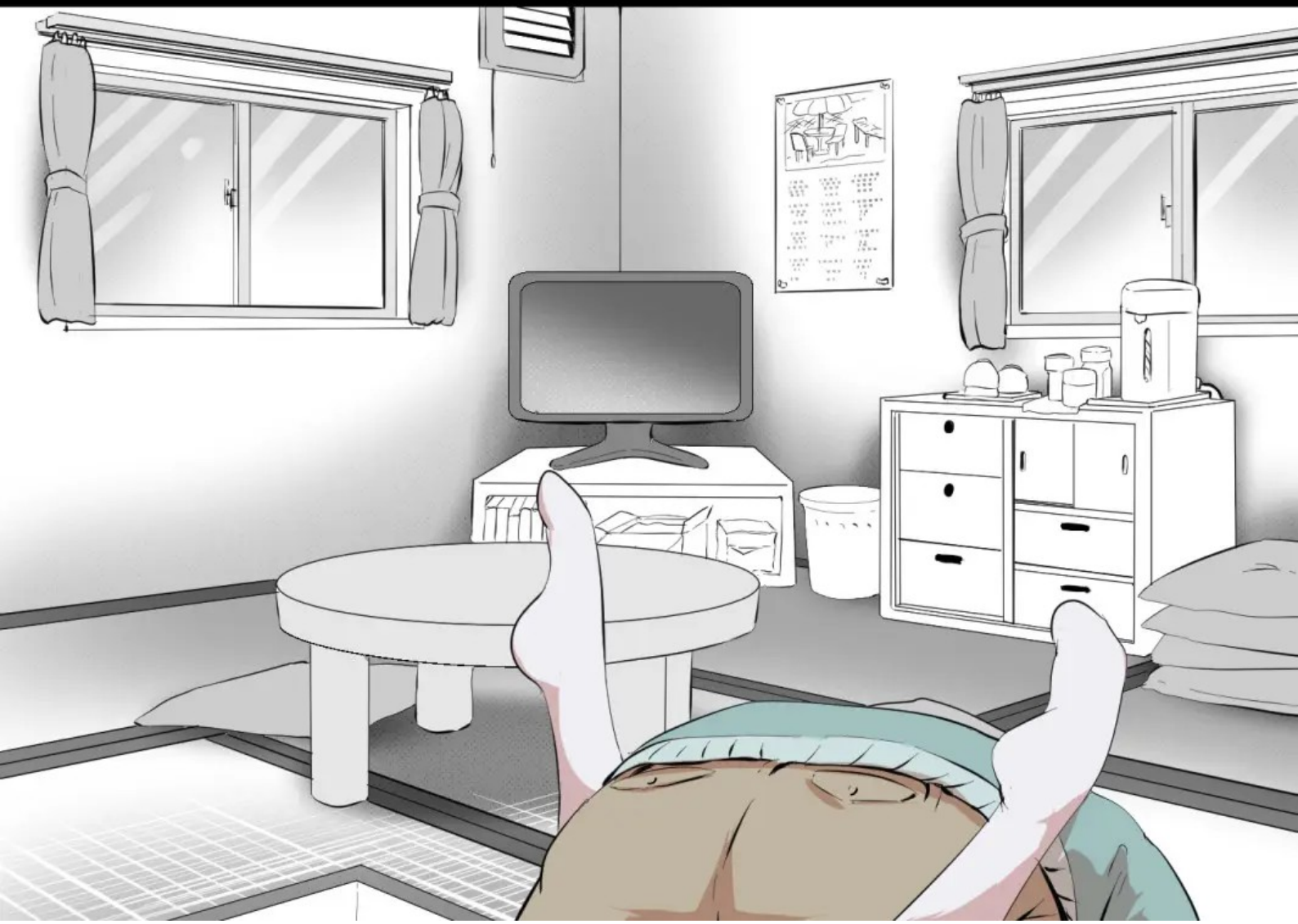
畑山「どっちでしよ…？」



畑山「がおー♪」  
心乃「きゃ〜♪」

そこから二人はただひたすら体を重ね合った。

初めこそおふざけごっこのような感覚で絡み合うが徐々に、互いの熱で互いを昂ぶり合っていく。



畑山「心乃ちゃん！セックス好き？」

心乃「す、好き…！セックス大好きい!!」

畑山「もっと言うって！たくさん…！」

心乃「セックス大好き！セックス大好き！

セックス大好き！セックス大好きい!!」



畑山「おじさんも心乃ちゃんとのセックス  
大好きだよ！」

「心乃ちゃんと二人きりで…秘密のスキ  
ンシップ…！」

心乃「私もおじさんとのセックス大好き！  
エッチってこんなに気持ちよくて楽しい  
ものなんだって…教えてくれてありがと  
うおじさん!!」

畑山「心乃ちゃん…心乃お…！」

心乃「~~~~っ!!」



畑山「ふう…ちよつと休憩にしようか」  
「心乃ちゃんもジュース好きに飲んで  
いいからね、小腹がすいたら適当に何で  
も食べていいし…ゆっくり自分のペース  
で啜えていこうよ」

心乃「ん…おちんちん啜えさせはする  
んですね…(笑)」

畑山「心乃ちゃんも止めはしないよね…」

心乃「もう…♪」



閉め切っていてもカーテンの隙間からはチラチラ西日が漏れていた。

…休日を丸一日使った。

畑山「ハアハア…」

心乃「…っ」

丸一日ずっとセックスしていた。  
セックス以外していない時間だった。



心乃「…おじさん」

畑山「…」

心乃「私、馬鹿が付くくらいのおんきだから…多分ずっとこの調子で生きてたら、そのうち悪い人にいいようにされてたと思うんだあ」

畑山「…こんな風に？」

畑山は少し自虐を含ませ返答する。

心乃「…ううん」

「これはちがう、かな」

畑山「違う？」



心乃「…おじさんとのエッチは…嫌じやないんだもん」

「気持ちよくて、楽しくて…温かいの…」

「どうしてかなあ」

畑山「…どうしてだろう」



心乃「…ふふっ」

畑山「…はははっ」



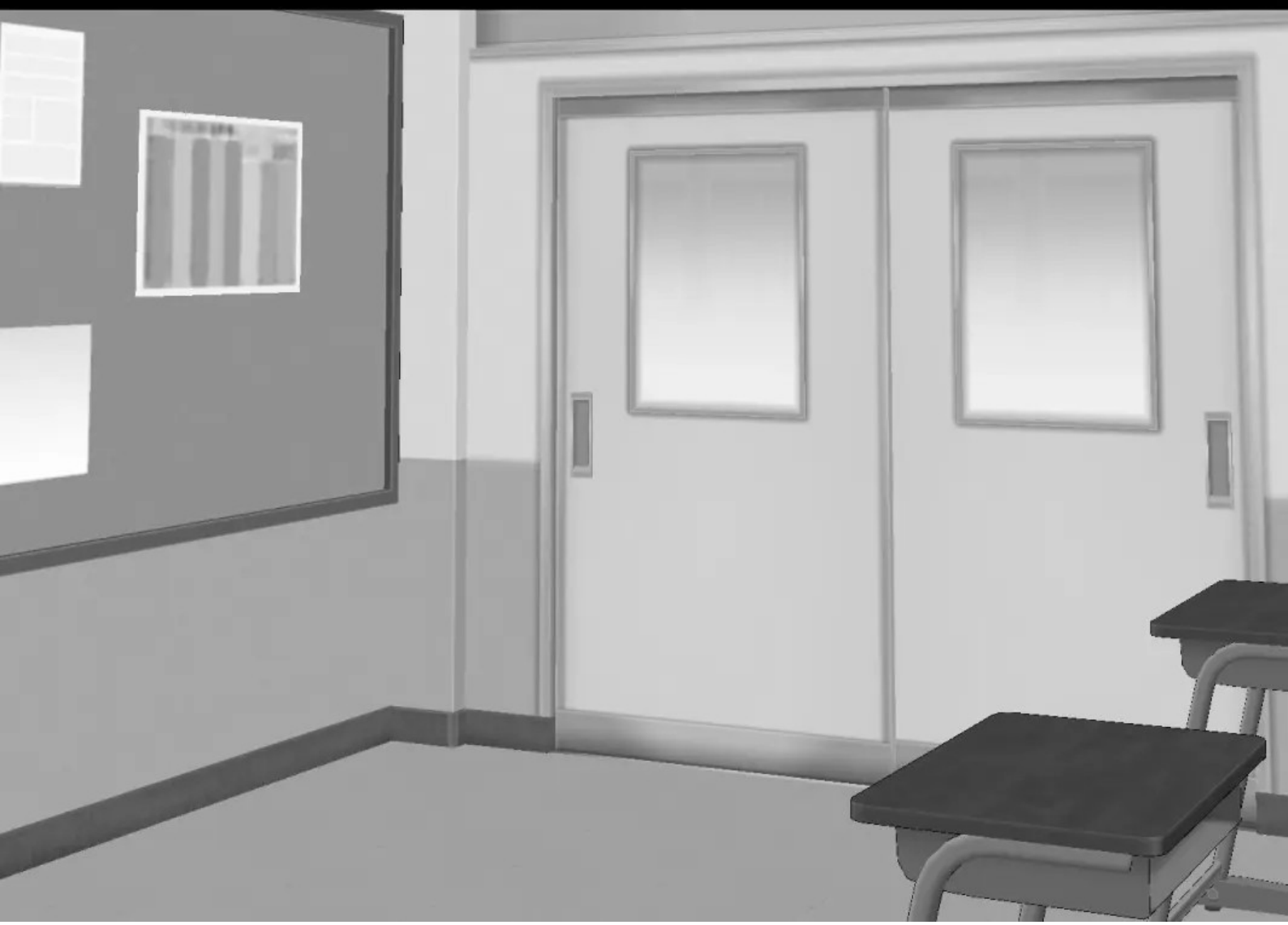
|| || ||

キーンコーンカーンコーン——

ホームルームが終わり、クラスメート

はざわつき出す。

部活や委員会、バイト、友達と寄り道など各々行動する。



心乃「友馬くん」

友馬「ん？どうした心乃、今日は一緒に帰るか？」

朝の登校こそ毎日一緒だが、最近では下校は中々一緒に帰れていない。

…心乃は心乃で予定や都合があるのだ。幼馴染だからとべったり構い過ぎるのもどうか、と俺は意識を改めた。

…まあ、一緒に帰れるなら嬉しい限りだが。



心乃「ごめんね…今日もちよつとお…」

友馬「そうか…」

心乃「でもね、その…」

友馬「？」

心乃「私、最近放課後は用務員のおじさんのお手伝いしてるの知ってるよね？」

宿直室でお茶とお菓子もらってね…色々相談に乗ってもらったりもしてて…」

友馬「うん…」

心乃「…それでね」

友馬「…」



心乃は何とも軸のないような喋り方を続ける。

要点がないというか、いまいち何を言いたいのかが分からない。

しかし、それでも薄っすら伝わってきたこと。



心乃「いい？すつつつごく内緒の相談して  
てるから絶対宿直室に来ちゃだめだよ！

「盗み聞きなんて絶対しないでね…

ぜつつつたいー！」

友馬「…ああ」



…フリ、というかまるで聞きに来てと言っているようにしか思えなかった。

心乃「それじゃあ、また明日ね！…絶対来ちゃだめだよ！」

友馬「…」

心乃は去り際に再びそう念を押す。

そのまま教室を出て恐らく旧校舎に向かった。



男子A「友馬、今日どっか寄りたいたいところある？」

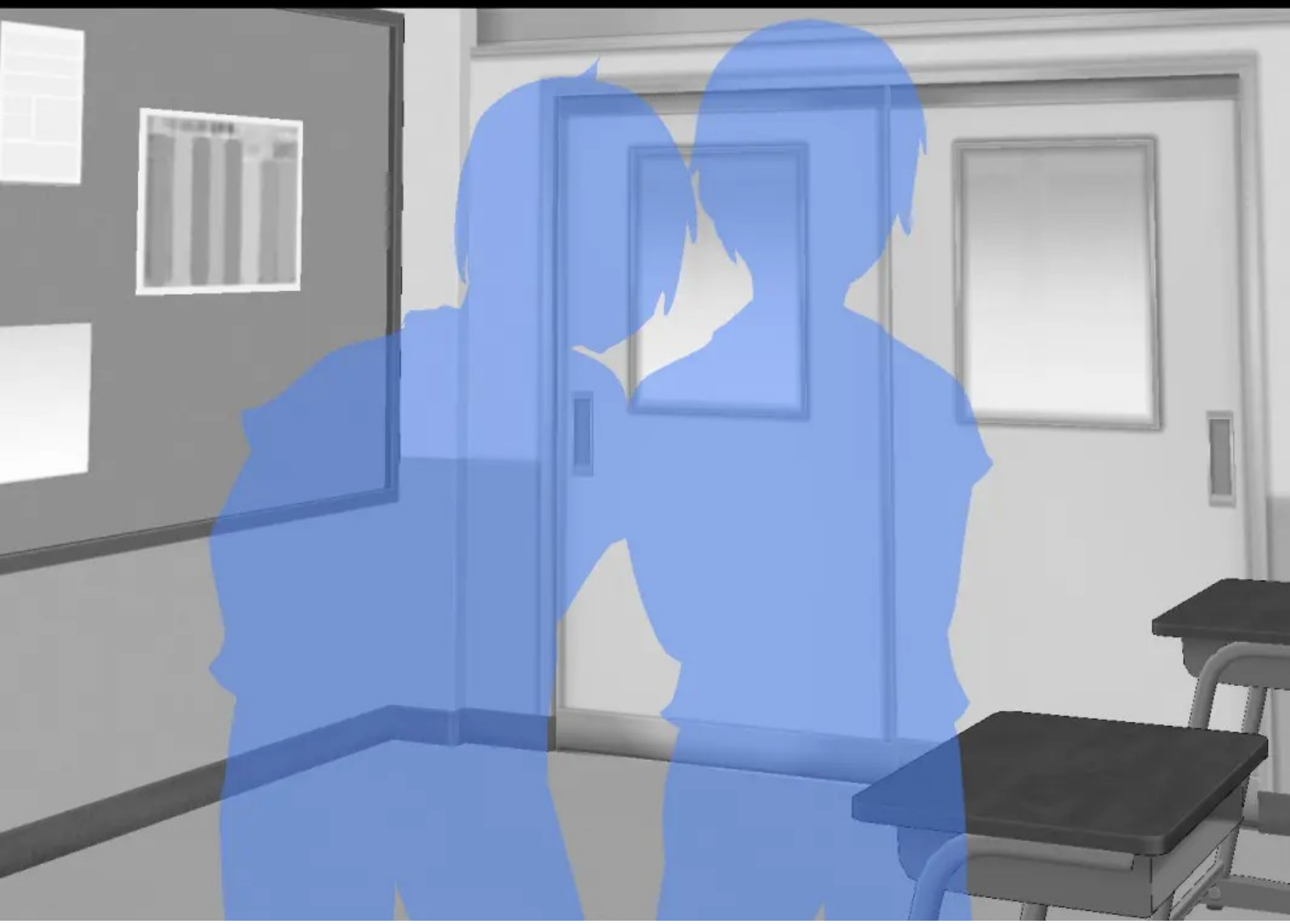
男子B「早く心乃ちゃんとセックスしろ！」

ぶっ飛ばすぞ!!」

男子A「WWW」

友馬「…ははっWW」

友馬「…」



□旧校舎…宿直室前

友馬「…」

来てしまった。

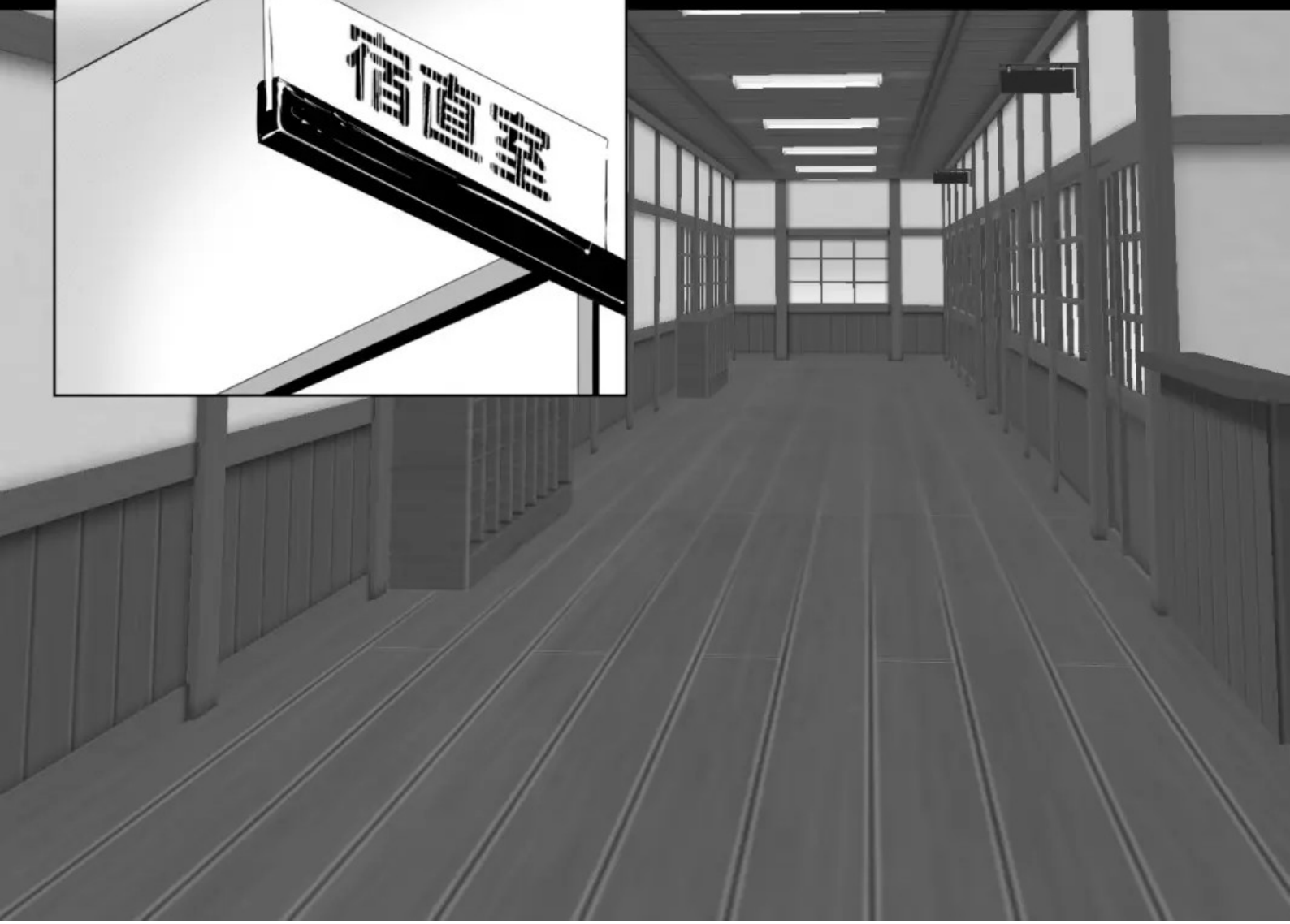
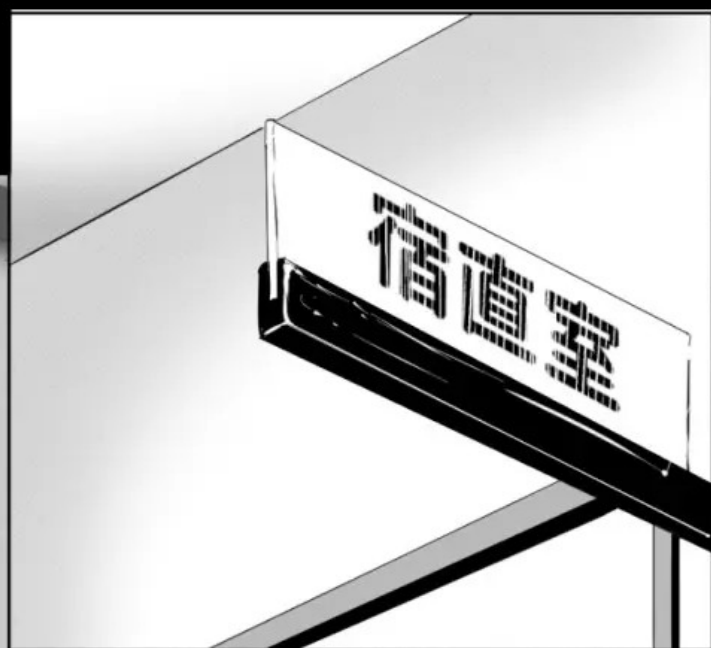
導かれるように。

まっすぐ伸びる木造の廊下では誰と

もすれ違わなかった。

相変わらず人っ気などない空間。

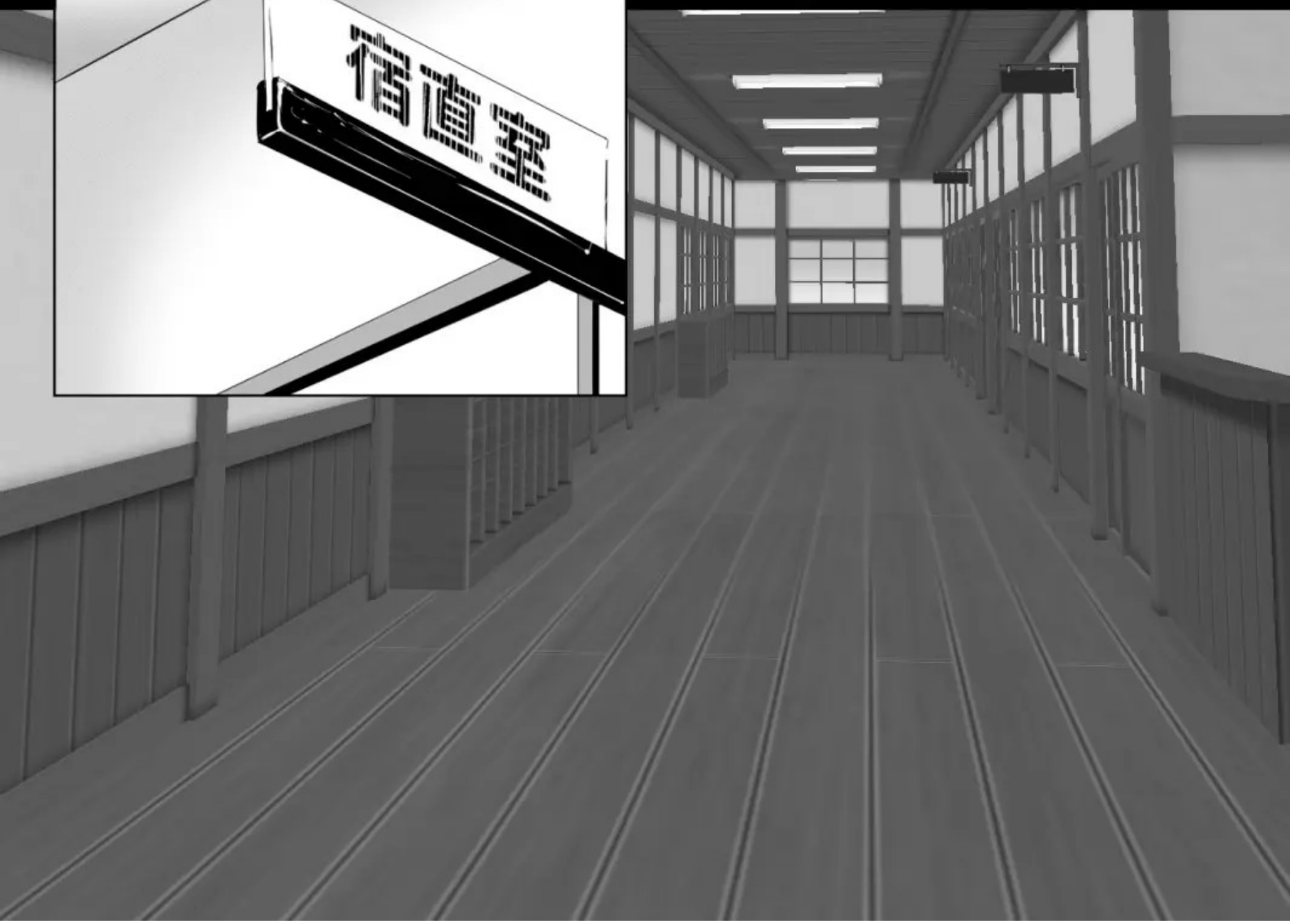
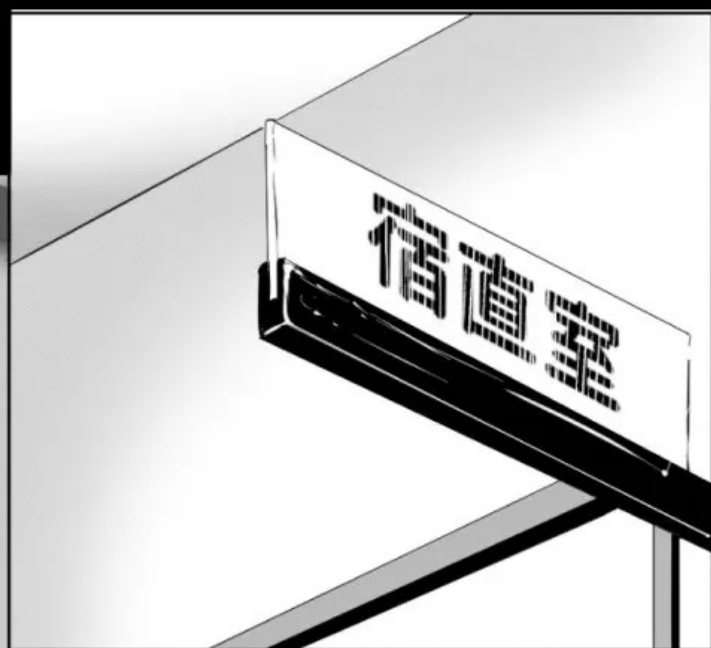
…本当に心乃は居るのだろうか。



心乃「~~~~つ」  
畑山「~~~~…」

声が聞こえた。間違いなく幼馴染の声だ。

宿直室のドアの隙間から二人の声が漏れてくる。

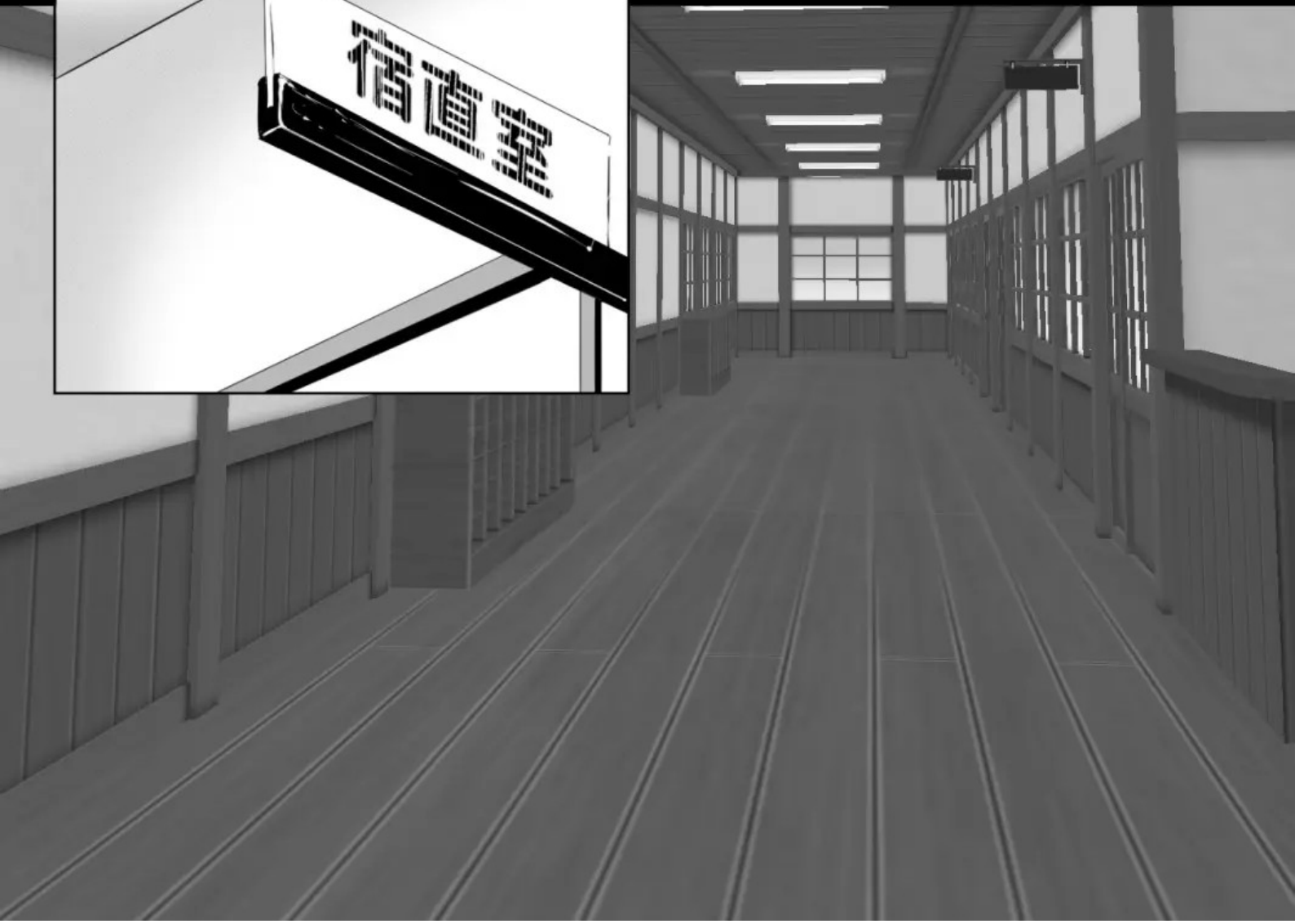
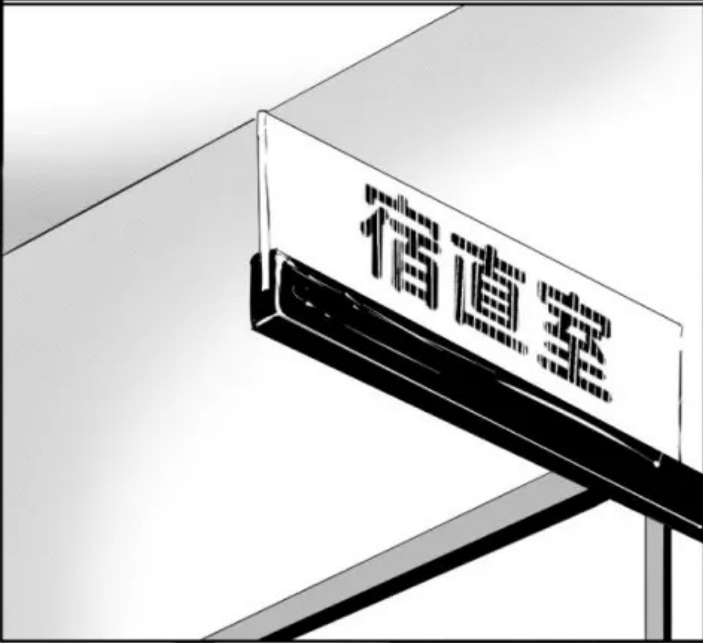


心乃「…友馬くん本当に私のことそんな  
風に思ってくれてるかなあ」

畑山「もちろんだよ、もうどのタイミング  
でも大丈夫っ」

「あとは想いを伝えるだけだよ」

友馬「…っ!？」



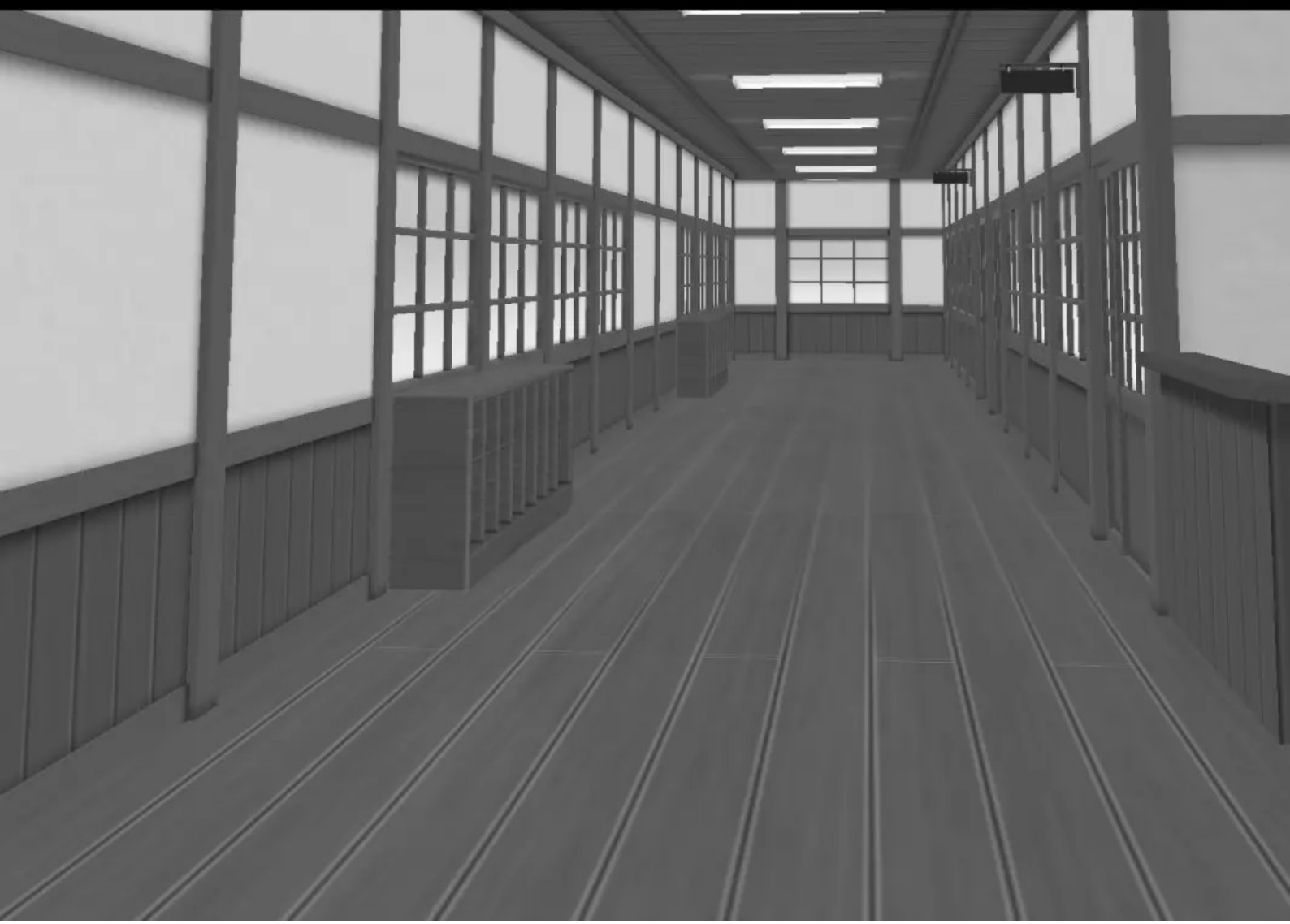
自分の名前が出てきた。

二人は俺のことを話していた。

畑山「友馬くんから言ってくれるのが理想というか…そうあってほしいんだけどねえ」

心乃「な、なんか近すぎて…一緒にいすぎてタイミングが掴めなくなっちゃったというか…(笑)」

畑山「はははっまあ、二人ならきつと思っ  
描く通りになれるよ！俺も応援してる  
からね」



心乃「ありがとうおじさん！ずっと相談  
乗ってもらって！」

友馬「…」

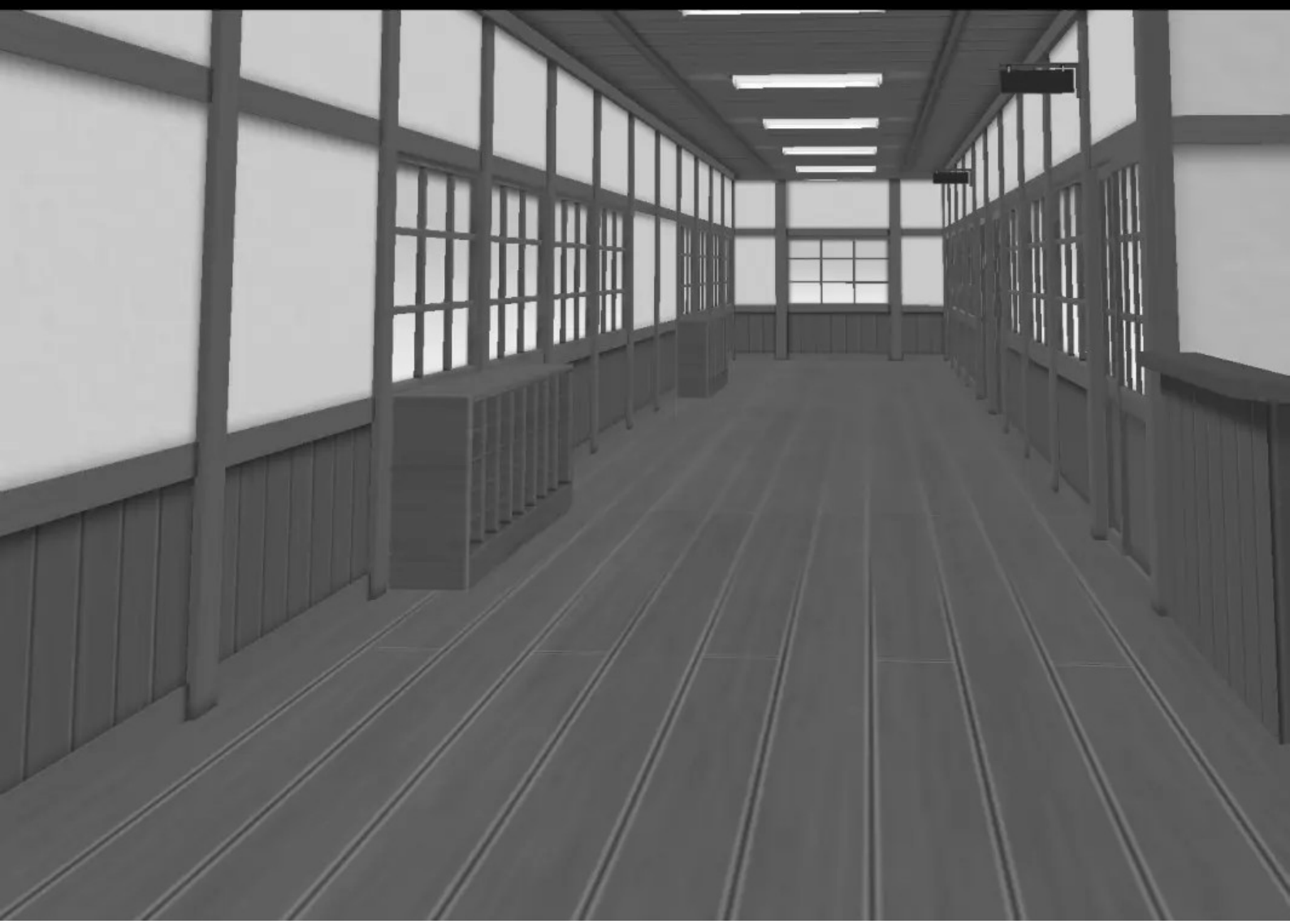
心乃は、このために放課後、旧校舎に  
向かっていたのだろうか。

俺は用務員のおじさんに嫉妬の感情  
を向けたりと勝手にモヤモヤしていた  
のに…。

友馬「…」

途端に恥ずかしさを感じる。

同時に湧き上がるのは嬉しさの感情。

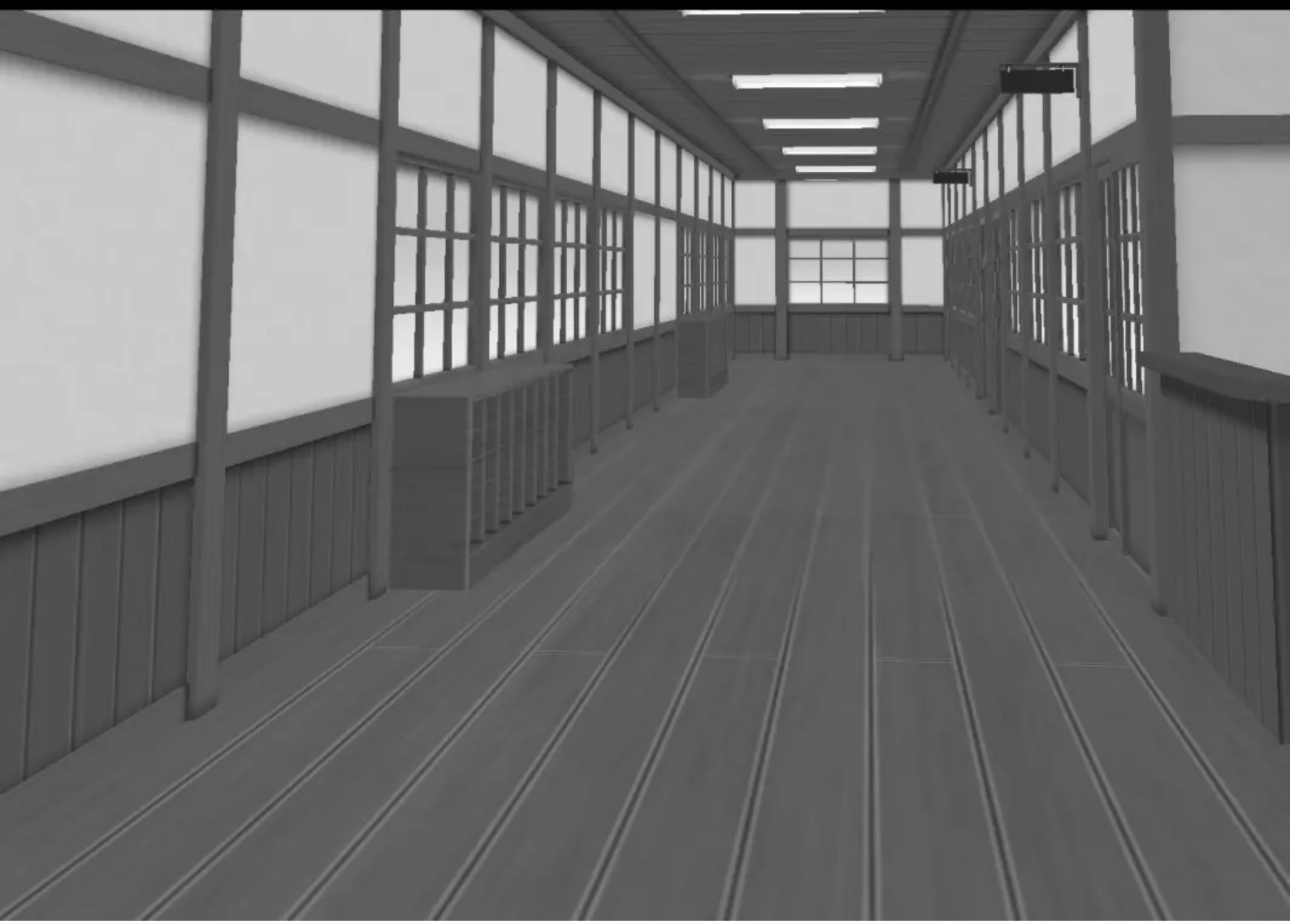


音を出さないようにその場からゆっ  
くり離れる。

旧校舎の木造の廊下を渡る。

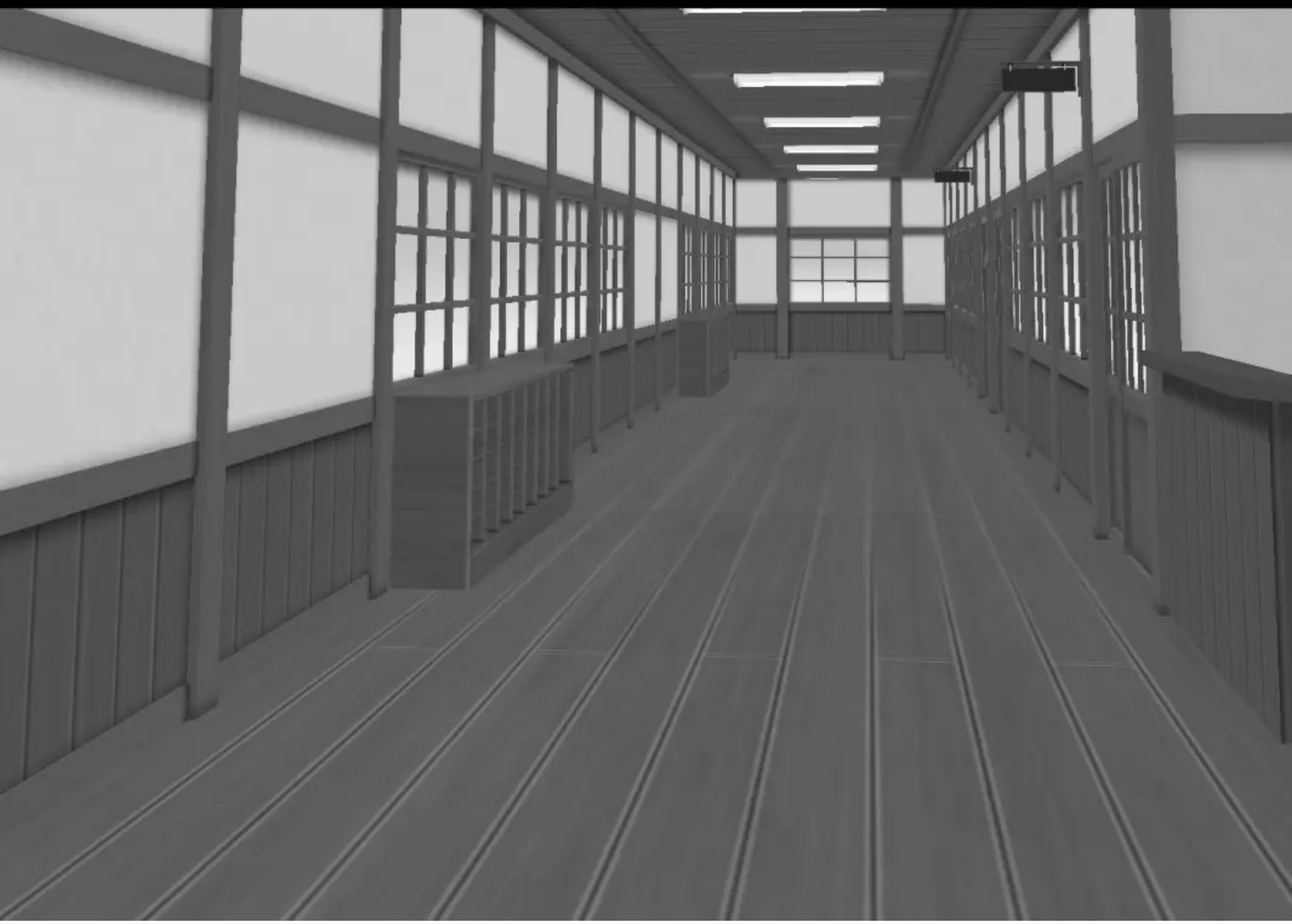
足取りが心なしか軽い。

友馬「心乃……」



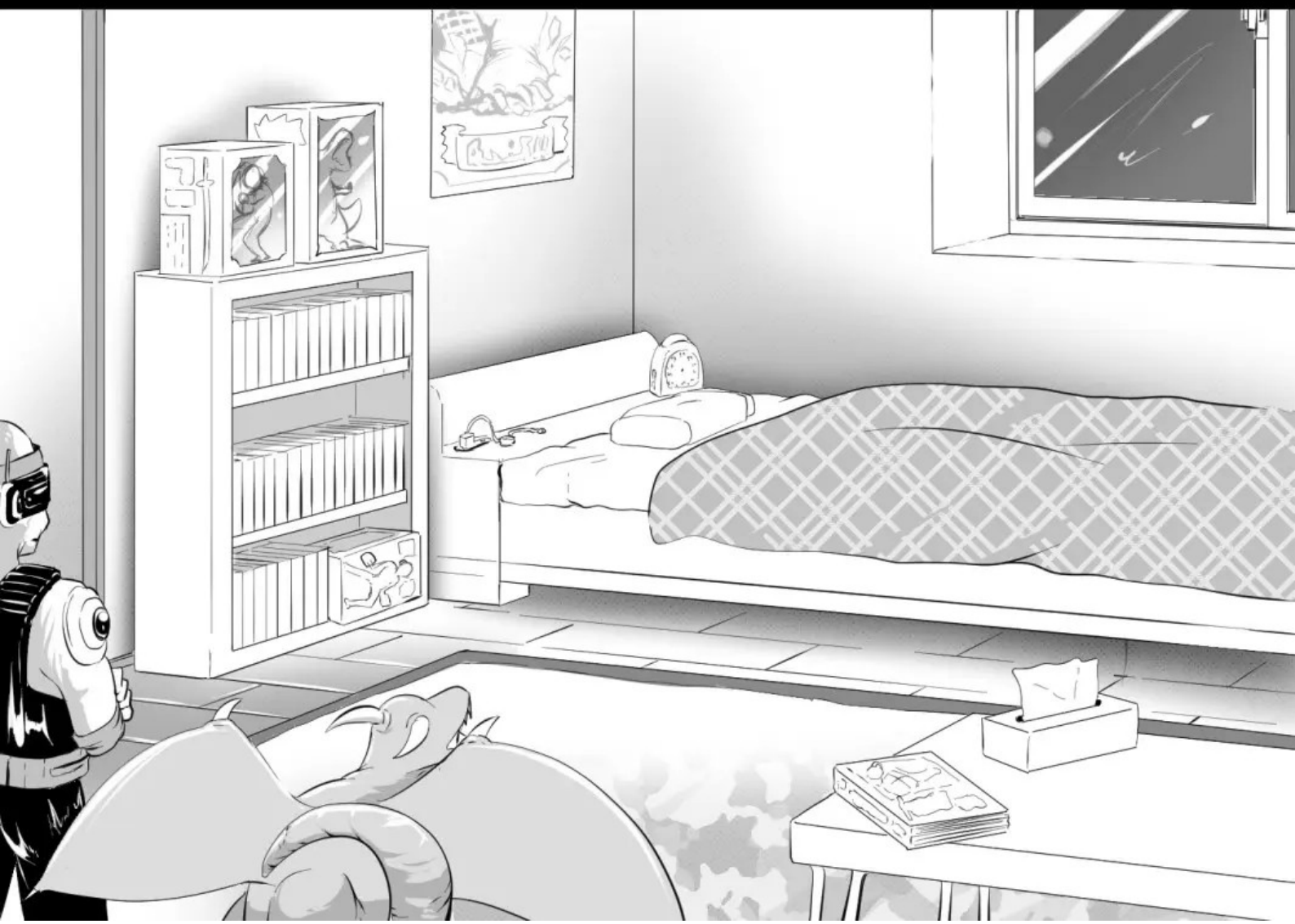
俺は心に決めた。

この想いを…心乃に…。



『こんばんわ友馬くん！』

その日の夜、といってもまだ19時前だったが心乃から連絡があった。





『今、家にはいないんだけど、』

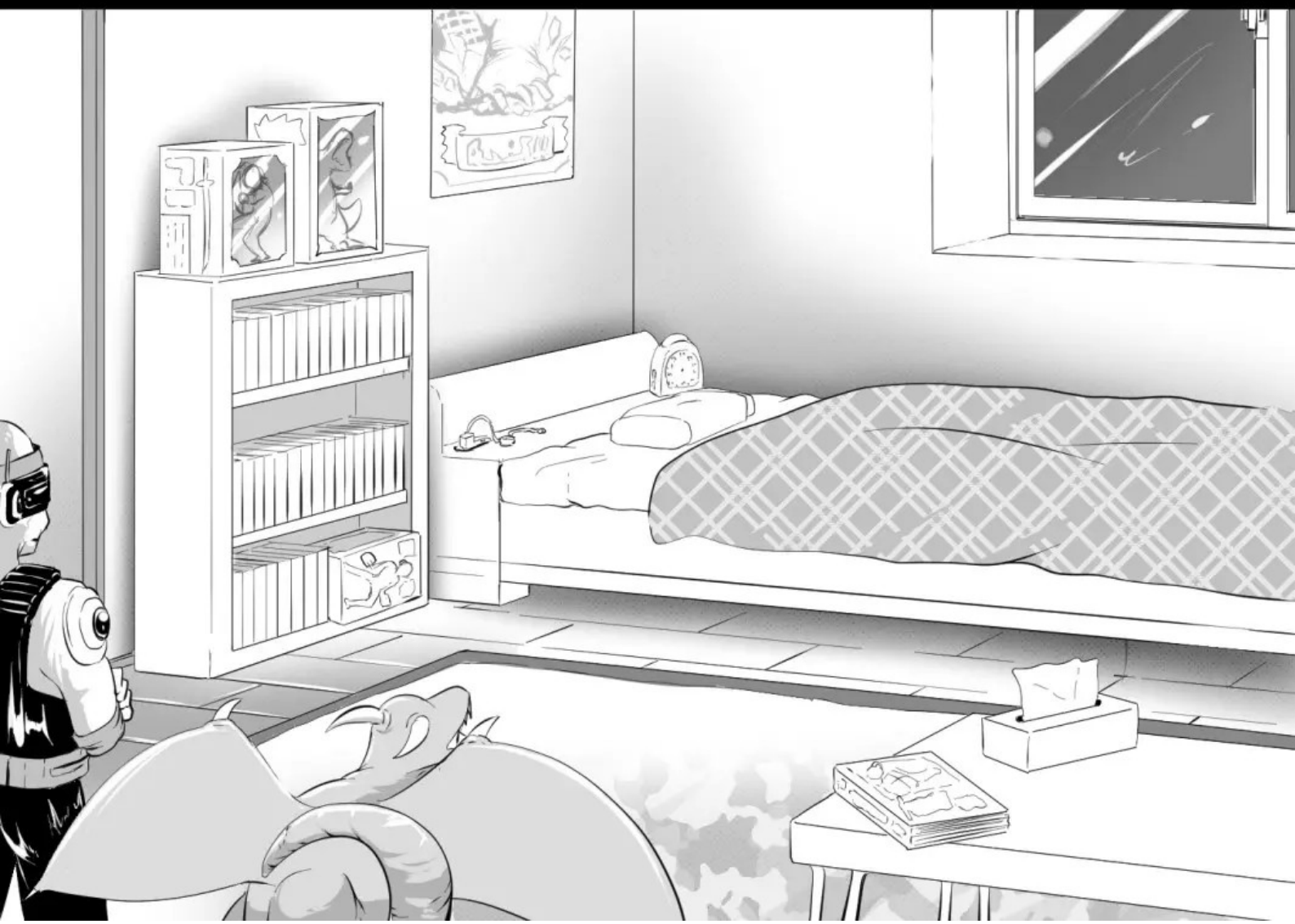
友馬くんをお願いしたいことが

あるのー！』

『もし、ウチから連絡が来たら』

友馬くんと一緒にいるってことと』

してほしいの…ダメかな？』



『 ちょっと遅くなるけど』

友馬くんと一緒だから

心配しないでって口合わせして

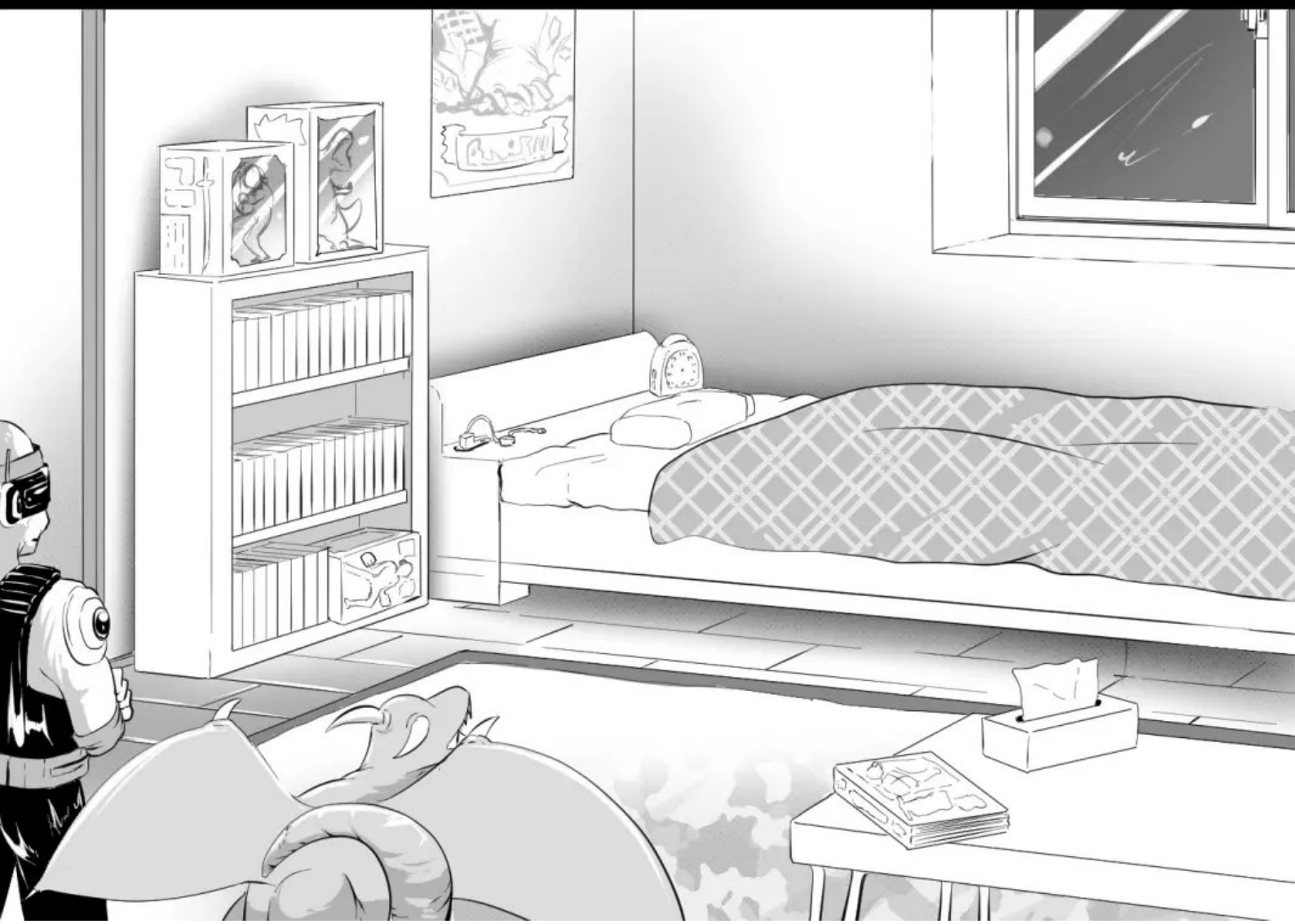
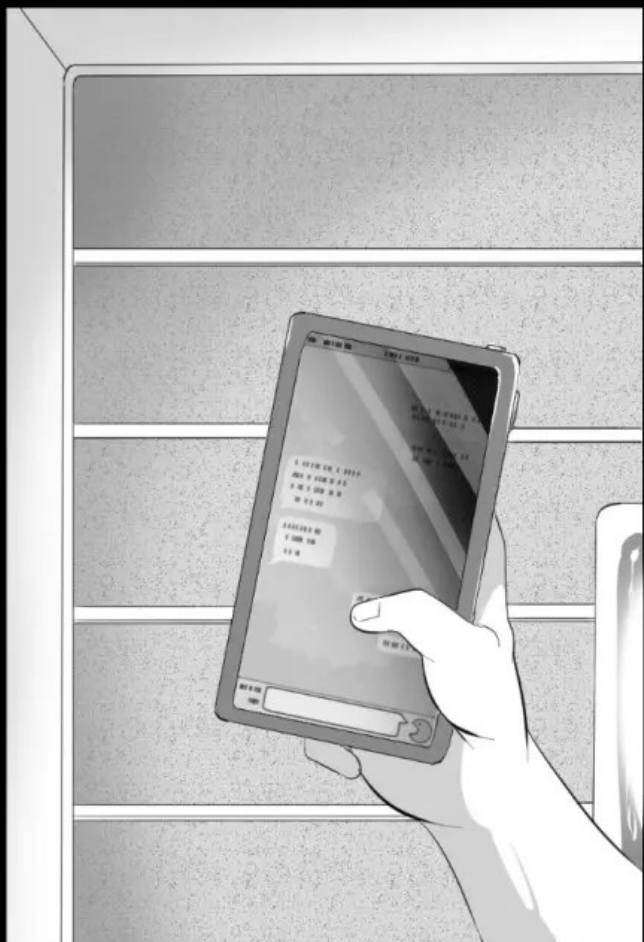
ほしいというか…』

『 別にねー！いけないことしてる訳

じゃないんだ！ただどうしても

理由は言えないっていうか…

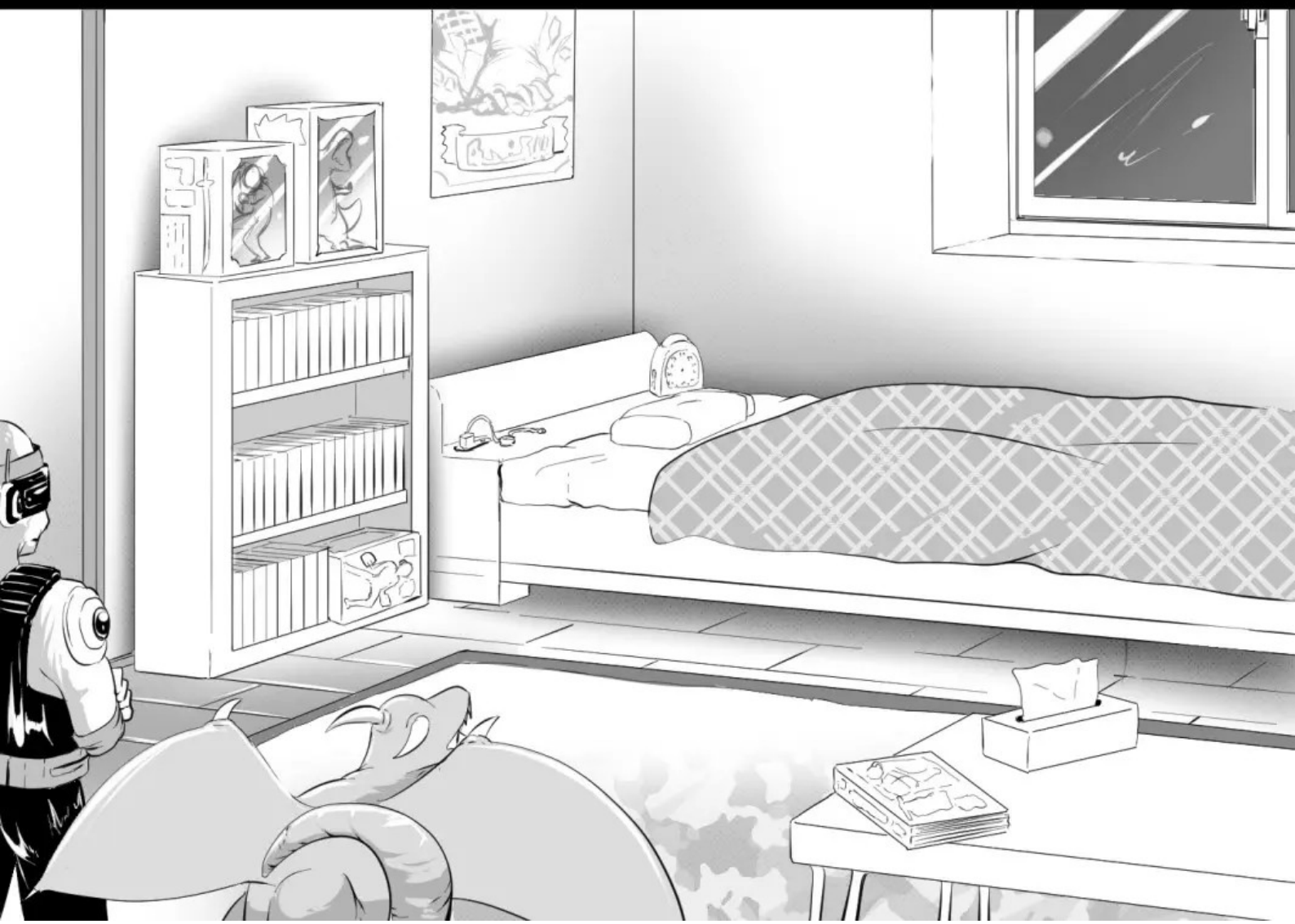
友馬くんであっても…』





友馬「…心乃」

『…友馬くんだから  
言えないというか』



心乃ちゃん！  
心乃ちゃん！！

お、じさんっ！  
おじさんっ…！！

『 分かった、理由は聞かない、  
でも遅くはなり過ぎないようにな  
』



畑山「心乃ちゃん好…!」

心乃「私も!!おじさんのこと好き!!」

畑山「俺の恋人になつ…」

心乃「なる!おじさんの恋人になる!!」

『絶対危ないことは

するなよ』



畑山「ハアハア…心乃ちゃん即答…W」

心乃「だってホントに好きだもん！茶化  
さないですよ…敏夫、くん♪」

畑山「！っああ、ごめんな…心乃」

『それと、俺も心乃に

ずっと伝えたいことがあった』

『じゃあ明日な』



畑山「お前は俺の女だ、心乃」

心乃「…はい♡」

そこでお互いのやり取りは終わった。

俺は自室でベッドに寝転がり天井を  
見上げる。

心乃…俺に想いを伝えるための練習  
でもしているんだろうか。



畑山「心乃！心乃お!!」

「お前は俺の女だ!!」

「俺の女！俺の女！俺の女！俺の女あ!!」

心乃「そっだよ！私は敏夫くんの女♡敏夫くんの女♡敏夫くんの女♡!!」

でも、明日は…俺から言っちゃる。

俺から心乃に想いを伝えてやる。

びっくりするだろうか。



私も友馬くんにそう言おうと

思ってたの！



同じこと思ってたなんて…

えへへ！私たちずっと一緒だった

幼馴染だもんね♪





「友馬くん！おはよう♪」

「おーっす」

俺には幼馴染がいる。

家も隣同士で何をしてもずっと一緒だった同い年の女の子、  
中牧心乃（なかまきこころ）。

当たり前のように同じ学校へ進学し、当たり前のように毎朝一緒に  
登校する。



心乃「♪」

友馬「…ははは、ドラマとか漫画なんかじゃよくあるけど…実際されると普通に歩きにくいな…」

心乃「ええ？？じゃあやめる…？」

友馬「…このままがいいです」

心乃「よろしい♪」



俺が心乃に想いを伝えてからひと月が経った。  
放課後、人っ気のない旧校舎に呼びだし想いを告げた。

心乃は驚いていた。

やっぱり私たち、幼馴染だね♪と。

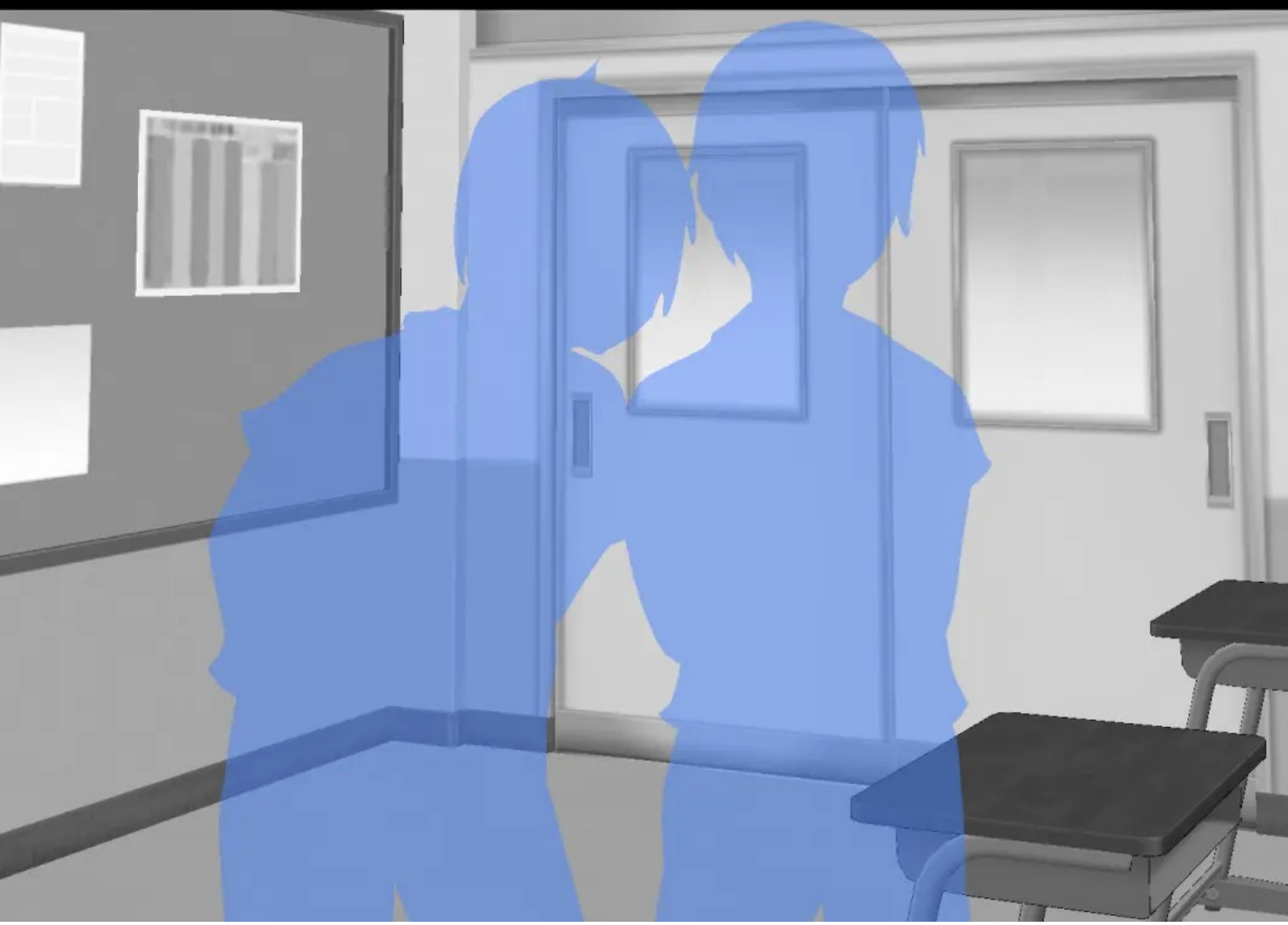


□放課後

男子A「しかしやっとかあゝ、ぶっちや  
け見てるこっちがもどかしかったしな」

男子B「早くセックスしろ!!」

友馬「…」



男子A「…え？」

友馬「……」

男子A「え？え？？マジで」

友馬「えーと、その」

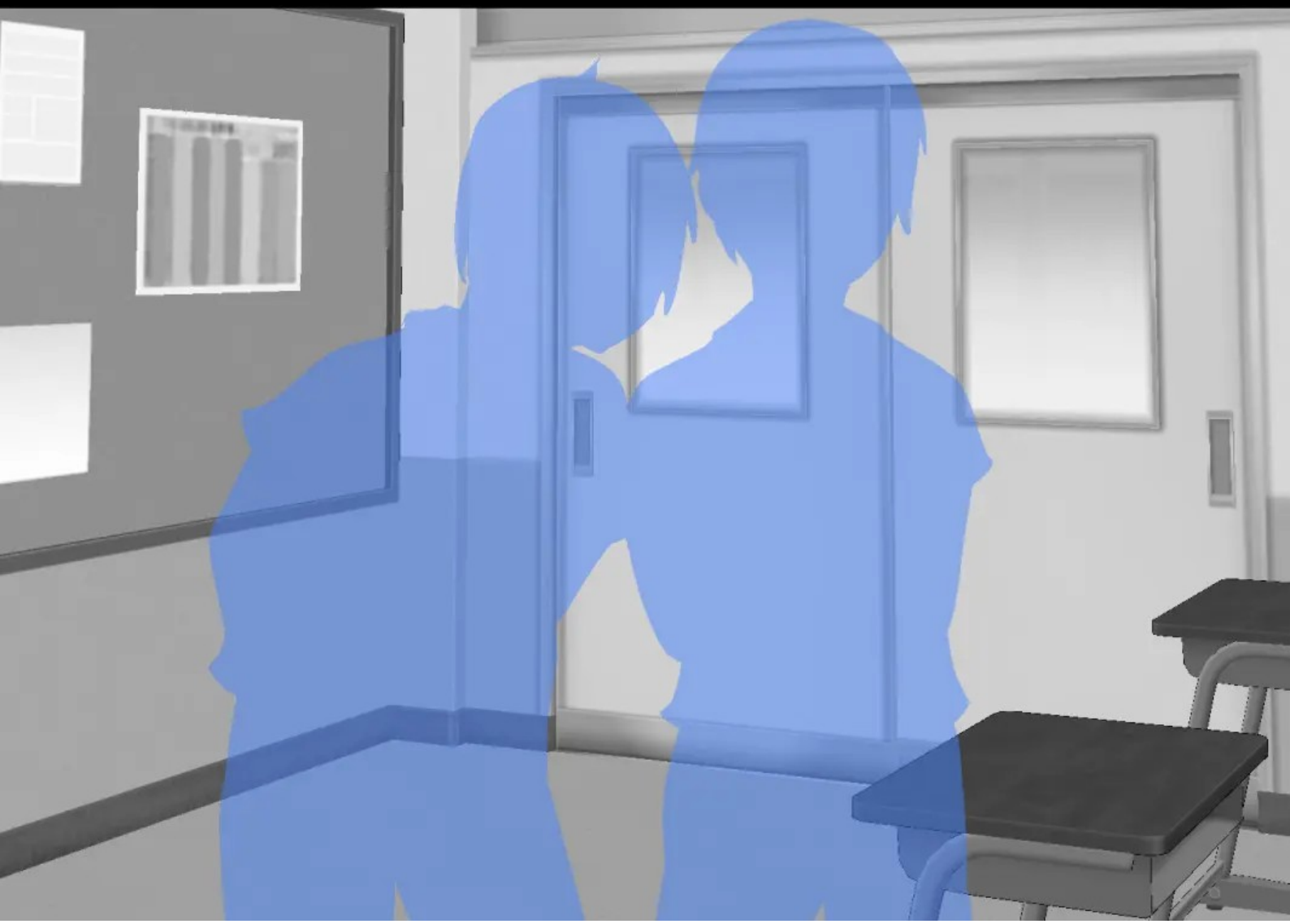
男子B「ほ、ホントにやったんですか…？」

友馬「急に素になるなよW」

男子A「WWW」

男子B「え、えええ？いいなあ…ど、どんな感じだったんです？」

友馬「あ〜…」



付き合い始めてからひと月。

正直、自分でももうその行為をするのは早いんじゃないかとは思った。

しかし、青春真っただ中の男子がそんな感情を抑えられることなど出来なかった。

いつも気兼ねなく一緒にいた自分の部屋。



一緒にゲームをしたり、勉強をしたり、  
ただずつと喋っていたり…。

そんな何でもなかった空間だったのに、  
ふと会話が途切れ目が合った時。

自分たちは一つ進んだ関係になったん  
だとじんわり想い、胸が熱くなった。



先週末も、俺の部屋で…。

友馬「心乃！心乃…!!」

心乃「あっあっ…ああ…っ!!」

友馬くん…！友馬くん…っ!!」



俺も心乃もお互いの十数年分の想いをぶつけ合うようにその行為を続ける。

二人ともずっと秘めていた気持ちを

ぐいぐい押し付けるように、

俺の方が、私の方がずっと想っ

ていたと張り合うように。



その子供みたいな意地の張り合いが  
妙に心地よかった。

たどたどしくも伝えたい想いはお互  
いすっかり分かっていた。

友馬「心乃！好きだ！！ずっと

好きだった！愛してる…っ！！」

心乃「あんっ！んんっ！！私も！

大好き！！友馬くん好き！！

愛してるう！！」



俺たちは…幼馴染だから。



友馬『心乃！心乃！！心乃おっ！！』

心乃『あん、あん、きもちいー、友馬くん  
だいすきあいしてるー』



畑山「心乃ちゃんこんな露骨に死んだ魚  
みたいな目しなくても…(笑)」

心乃「でもお〜…」

心乃(だってそういうことすると…敏夫  
くん喜ぶじゃん…(笑)大体こっさり撮れ  
って言ったのも敏夫くんだし…♪)



畑山「何回シたんだっけ？」

心乃「…一回、です」

畑山「い、一回…!?ま、まあ回数が愛の大  
きさなんてことないからね」

心乃「そ、そうですよお！例えたった一回  
だったとしてもそこに友馬くんの愛は  
間違いなくあるんです！たったの一回  
だとしても!!たったの!!」

畑山「ごめんごめん(笑)」

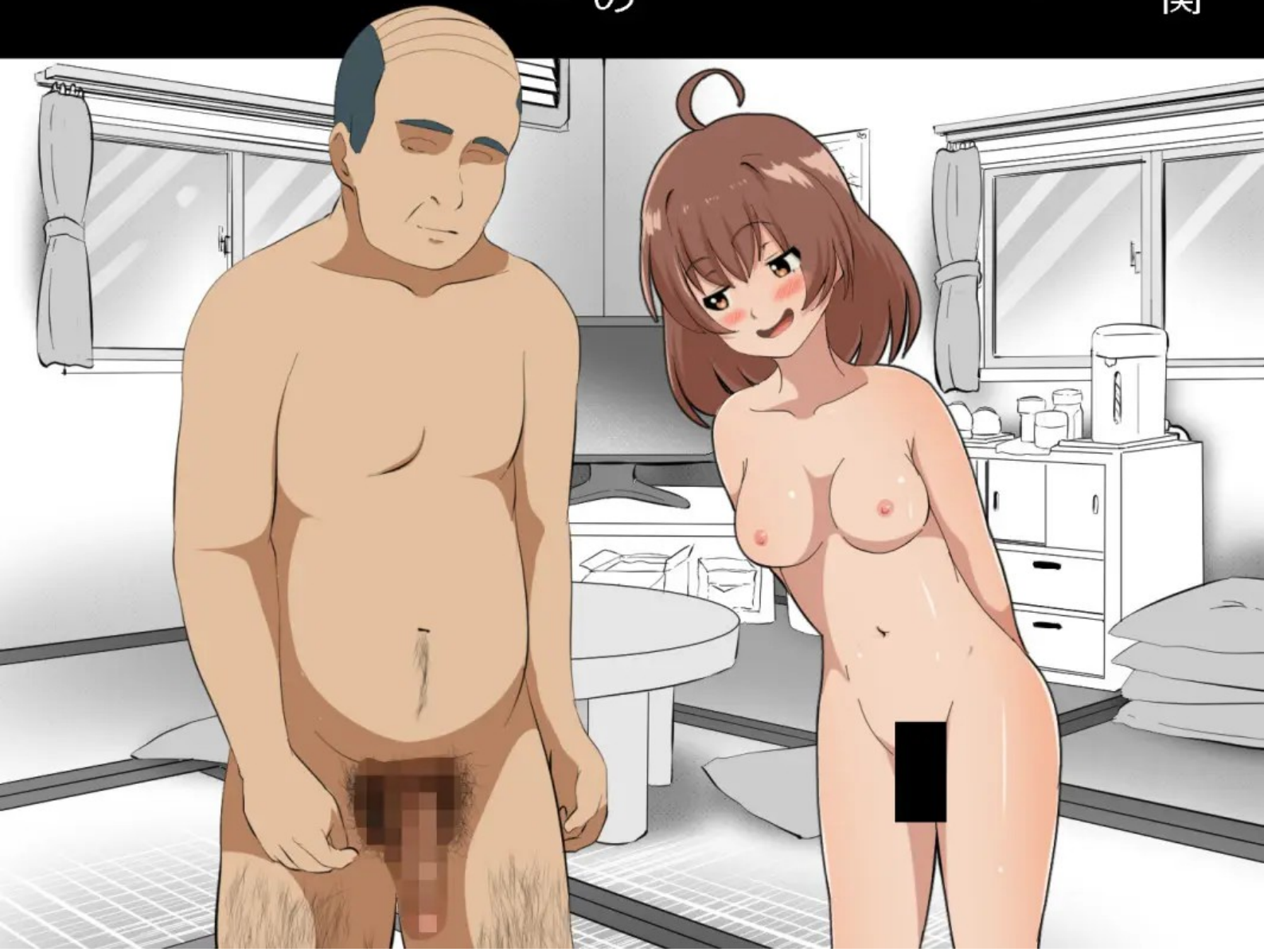


心乃「それに…友馬くんとの関係は体の関係だけで表せるものじゃないですし…」  
「一緒にいるだけで、何もしてなくても心がじんわり温かくなるんですよお♪」

畑山「…」

心乃「やっぱり十数年築いてきた幼馴染の絆って特別というか…代えがたいモノなんですよ♪」

畑山「…へえ」



心乃「…♪」

畑山「それは確かにそうだね…対して俺と心乃ちゃんは出会ってまだ一年も経ってないもんね…」

「その差を埋めるためには…」





畑山「セックス回数が真実の愛の大き  
さ！俺の方が心乃ちゃんのこと愛して  
るんだ!!」

心乃「ほおっお…お!!」

畑山「心乃ちゃ…心乃お!!心乃は俺の  
女!!俺の女!俺の女あ!!」

心乃「~~~~っ!!」



心乃(敏夫くんとのセックス…一番気持  
ちいいのって…友馬くんのこと話して嫉  
妬させちゃう焼きもちセックスなんだよ  
ね…♡)

心乃(敏夫くんたら…暴走機関車みたい  
になって止まらなくなっちゃって…ちん  
ちんずっとパンパンに膨らませて…♡)



心乃(ごめんね友馬くん…

敏夫くんとの関係…いつか  
バレちゃうかもしれないけど

その時は私のことなんか

すぐ捨ててね…

最低変態バカ女って罵って

さっさと忘れて…

新しい恋を見つけてね…



心乃(友馬くんならきつと  
優しくてかわいい女の子に  
出会えるから…

幼馴染の私が言うんだから  
間違いないよ！)



心乃(最低な私は…)

最低な敏夫くんと…♡)



—おしま—



# おまけ

心乃「わーすごーいこれが友馬が私を愛してる証拠なんだねー」

「サラサラ透明で一切濁りがない、まるで持っていないくらい軽い澄み切った友馬さんの純粋な想いが形となったものなんだねー」

友馬「は、恥ずかしいな何か……！  
ていうかこれ本当に撮るのか」  
心乃「もちろん！毎日が友馬さんの大切な記念日だもん♪」





心乃「重お~~~~い♡♡♡」

「ねっばねばのミルクィイエローで  
重厚感のある濃お〜い愛が形となった  
もの…♡」

「これが敏夫くんが私を  
愛してる証拠なんだね〜♡」



畑山「こんな写真送りつけて…何が言いたいのかな？」

心乃「んんん？別に何でもありませんよお？ただ昨日も友馬ちゃんとラブラブな時間を過ごしましたって伝えたかっただけなんです」

畑山「へえ…」

心乃「私すっつっつごく幸せそうな顔してるでしょ？」(笑)？」

畑山「…そうだね(笑)」



心乃「ていうかこの量…♡…10倍以上あるよぉ♡」

畑山「誰のと比べて？」

心乃「あ！私ったら…

今のナーシ(笑)」

畑山「まったく…そんなもので愛の大きさを測ろうとしちゃ

いけないな」

心乃「はぁ…い

ごめんなさぁ…い♪」



心乃(ふふっ♪♪♪)と言われると  
ホントは嬉しいっせ♪♪)

(敏夫くん…可愛い♡)

絶対結婚して

あげるからね♡)



